

東北大学高等教育開発推進センターアウトリーチプログラム(7)
青森県教育委員会グローバルな志の育成事業「グローバルリーダー育成拠点校事業」

地元って何だろう？



平成 27 (2015) 年 2 月

東北大学高度教養教育・学生支援機構
青森県教育委員会

「地元って何だろう？」

日時 平成 26 年 11 月 12 日 (水) 13:30 ～ 16:30

会場 弘前市民会館 (青森県弘前市)

対象者 青森県立弘前中央高等学校, 青森県立弘前高等学校, 青森県立弘前南高等学校, 弘前学院聖愛高等学校, 東奥義塾高等学校 1～2 年生, 保護者, および, 教員

[プログラム]

開会挨拶 よし だけん 吉田健 (青森県教育庁学校教育課副参事)

注意事項 (司会) いずみ つよし 泉 毅 (東北大学大学院教育情報学教育部博士課程在籍中)

講演

(1) 遊学のすすめ ——なぜ『リスニング』が必要とされるのか?——

くらもとなおき
講師: 倉元直樹 (東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授)

自分の生まれ育った土地で, 平凡でも安定した毎日を送る。多くの人にとって, 昔も今もそれが幸せの根本かもしれません。ただ, 幸せの原型は変わらなくとも, 幸せに至る道筋はずいぶんと違ったものになってしまったようです。そして, これからも変わり続けるのでしょうか。親子で「センター試験リスニング」を体験しながら, 今までの, そして, これからの「幸せに至る道」に思いを馳せてみましょう。

(2) 地元へ帰ろう

こまつ めぐみ
講師: 小松 恵 (仙台医療センター附属仙台看護助産学校教員)

長年海外に暮らした人が帰国を決意した時, どこに居を構えるのだろうか。私の場合, 実家のある岩手ではなく, 渡米するまで働いていた仙台だった。実家も仙台も暮らした年月は同じ 18 年間。条件の良い仕事は東京の方が多かった。でも, 私は仙台に帰った。そこが私の「地元」だったから。なぜなら, そこには…。

(3) 九州, 東京, 東北, そして九州——行って, 帰って発見した「地元」——

にしごおり だい
講師: 西 郡大 (佐賀大学アドミッションセンター准教授)

「地元に残りたい」「地元から外に出たい」。あなたはどちらですか? 私は後者でした。ですが, 今, 地元九州で働くことがとても楽しい。2 年間にわたる浪人生活からの脱出, 東京での有頂天学生生活, 満員電車で将来の不安を思うサラリーマン時代, 脱サラしてから 5 年間にわたる東北での転職活動。何の運命だか地元九州で再就職。行って帰って発見した私なりの「地元」をお話しします。

お礼のこたへ たかだり ほ 高田梨帆 (青森県立弘前中央高等学校)

閉会挨拶 くらもとなおき 倉元直樹 (東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授)

地元って何だろう？

目 次

開会挨拶	
吉田健（青森県教育庁学校教育課副参事）	1
注意事項	
（司会） 泉毅（東北大学大学院教育情報学教育部博士課程在籍中）	3
遊学のすすめ ——なぜ『リスニング』が必要とされるのか？——	
講師：倉元直樹（東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授）	5
地元へ帰ろう	
講師：小松恵（仙台医療センター附属仙台看護助産学校教員）	17
九州，東京，東北，そして九州 ——行って，帰って発見した「地元」——	
講師：西郡大（佐賀大学アドミッションセンター准教授）	29
お礼のことば	
高校生代表：高田梨帆（青森県立弘前中央高等学校）	43
閉会挨拶	
倉元直樹（東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授）	45
アンケート集計結果・参加者数推計	47

開 会 挨 拶

青森県教育庁学校教育課副参事 吉田健



皆さん、こんにちは。県教育庁学校教育課の吉田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。東北大学高度教養教育・学生支援機構アウトリーチプログラムの開会に当たりまして、一言ごあいさつ申し上げます。

このプログラムでございますが、本県では平成 20 年に青森市で開催して以来、むつ市、三沢市、五所川原市、八戸市で実施されて参りました。毎回ひとつのテーマを取り上げて、全国の大学の先生方に講演していただくことで、参加した高校生がそれまでの認識を新たにする貴重な機会となっております。今回 6 回目となりますけれども、ここ弘前市民会館に、約 1,300 名の高校生、教員、保護者の皆様が集まり、「地元って何だろう」をテーマに実施することになりました。

さて、今日の世界においては、社会、経済、文化のグローバル化が急速に進展し、国際的な流動性が高まっております。また、

科学技術の進歩と、社会の高度化、複雑化といった、急激な変化に伴い過去に蓄積された知識や技術のみでは対処できないような様々な課題が生じております。このような中、豊かな語学力や、コミュニケーション能力、主体性や積極性、異文化理解の精神等を身に付け、様々な分野で活躍できる、いわゆるグローバル人材の育成が求められております。

しかしながら、それらの能力や心の育成には、その大前提として、日本人としてのアイデンティティ、日本の文化に対する深い理解、こういったものが必要となります。地元を知り、日本を知り、そしてグローバル化の進む社会における様々な経験や体験を踏まえることが、世界で活躍する、あるいは地域に貢献することにつながると思っております。

本日は、東北大学の倉元先生、佐賀大学の西郡先生、仙台看護助産学校の小松先生の、3 名の先生方による大変魅力的な公演が予定されております。御三方とも地元や日本を離れた中でのたくさんの経験をお持ちだと伺っております。皆さんには講演を通して、地元や自分自身を見つめ直し、10 年後、20 年後の自分の未来を考えるきっかけをつかんでいただければと思っております。

結びに、主催者である東北大学、並びにご協力いただきました大学入試センターの皆様にご心から感謝申し上げますと共に、本日のプログラムが、会場に集まった皆さん一人一人の未来を切り拓く、「生きる力」を

身に付ける貴重な時間となりますことを願
いまして、あいさついたします。本日は
よろしくお願いいたします。

(拍手)

注 意 事 項

東北大学大学院教育情報学教育部博士課程在籍中 泉 毅



講演に入る前に注意事項が2点ございます。まず、その注意事項についてお話しいたします。

1点目はリスニングに関する注意事項です。倉元先生の講演の中で、リスニングの試験のデモンストレーションが行われるのですが、そのリスニング体験用の機器はお借りしているものですので、返却していただくよう、お願いいたします。また、リスニング体験中の際には、物音が出ないように心掛けていただきますよう、よろしくお願いいたします。

また、本番のセンター試験ではリスニングは30分ほどあるのですが、今回は全ての問題は解かずに、一部の問題だけを解くということになりますので、こちらもご了承ください。また、プレーヤーは電源を入れてしまいますと、終了までスイッチを切ることができません。ですので、スイッチを入れたままでの返却となります。また、リスニングの解答について、正解表につきま

しては全てのプログラムが終了しまして、アンケートを回収する際に、アンケートと引き換えで正解表をお渡ししています。このアンケートの回収ボックスというのも、建物の出口にあります。どうぞよろしくお願いいたします。

2点目は、アンケートに関しての注意事項です。まずアンケートを書くためには、筆記用具が必要ですので、事前に用意しておくようお願いいたします。もし、筆記用具を今日持っていないという方には受付でお貸しすることができますので、受付で借りていただくか、周りの友人の方に借りてください。また、アンケートの記入は全ての講演の終了後にお願いします。先ほども申しましたが、記入済みのアンケートは、全ての講演の終了時に回収いたしますので、回収ボックスにお入れいただきますようよろしくお願いいたします。

注意事項は以上となります。それでは、引き続いて演題に移りたいと思います。まず、最初の演題は、「遊学のすすめ——なぜ『リスニング』が必要とされるのか？——」というタイトルで、東北大学の倉元先生にお話ししていただきます。

それでは、倉元先生お願いいたします。

游学のすすめ

——なぜ『リスニング』が必要とされるのか？——

東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授 倉元直樹



人生一番の「崖っぷち」

皆さん、こんにちは。東北大学の倉元と申します。これから50分ぐらい話を聞いてください。よろしくお願いします。

最初に、今日の話のキーになる、マジックナンバーがあります。「36」という数字。それをちょっと頭の中に入れておいてください。

皆さんに質問です。今日ここに来ている皆さん、高校1年生か2年生がほとんどだと思いますけれども、これまで自分が生きてきた人生の中で、一番「崖っぷち」だと思った出来事って何でしょう？人それぞれ、色んな経験をしてきているだろうから、色々あると思います。

私は今年で53歳になったのですがそれでも、振り返ってみると色々な出来事があり

ました。例えば、これはもう皆さんが子どものときだったからほとんど記憶がないかもしれませんが、2001年9月11日に、アメリカで「同時多発テロ」という事件が起こったんですよね。ビルに飛行機が突っ込んだ事件。テロリストが世界中で暗躍するようになったきっかけになった大事件だったのですが、その時、ワシントン D.C. でもペンタゴンという施設に飛行機が1機突っ込んでいます。その時、私は39歳だったのですが、たまたま、そのワシントン D.C. にいて、命からがら日本に帰ってきました。

それから、こちらは記憶に新しいですね。3年前の東日本大震災、3月11日ですね。この時は49歳だったのですね。私自身は出張の帰りで、仙台駅に新幹線が着いたあと、ちょうど駅の外に出た時に地震がありました。

ただ、自分の人生を振り返ってみて、一番の「崖っぷち」って、同時多発テロでも、東日本大震災でも、ないんですよね、自分の中では。それは、実は、36年前にさかのぼります。高校2年生だったある時、その時は、まだ16歳でした。

何が「崖っぷち」だったのか。さあ、皆さんで同じような経験をしたことがある人はいるでしょうか。ちょっと手を上げてもらおうかな？私の場合、テロリストと間違

われそうになった。しかも、生まれて初めて行った外国でそういうことが起こった。テロリストと間違われそうになった人っていますか？いないよね？

どういう状況だったのでしょうか。もう、正確な日付は覚えていません。1978年9月です。場所はイギリスのロンドンの国際空港、ヒースロー空港というところでした。

当時は北海道の旭川市というところに住んでいたんですけども、友達4人でイギリスに到着しました。そこまでは良かったのですが、自分以外の3人が入国審査から出てこない。「遅いな」と思って様子を見に行ったら、3人が別室に連行されていくところだったんです。それを私は目撃したんですね。取り調べがあって、「下手をすると、皆、日本に強制送還になって、自分だけだ1人イギリスに残るのかな」などということぐるぐる思いながら、空港のロビーで6時間過ごしました。友達3人が釈放されるまでの6時間、1人で外国の空港に残されたんです。

今、考えても、人生一番の「崖っぷち」です。「このまま、一生、日本に帰れないんじゃないか」と思いました。

それでは、その時、私はどうしたのでしょうか……。どうしたと思う？

答……何もしなかった。

そのまま、空港のベンチに座っていました。本当のことを言うと、何もしなかったのではなくて、何もできなかったのです。何をしてもいいかどうか分からなくて、ただただ、茫然と時差ぼけの頭を抱えて6時間座っていました。

一番の反省点は何かというと、空港に着いた後、自分自身がどこに行くのか知らな

かったということです。実は、4人の中で1人、学年が上の先輩がいて、その人に全部任せっきりにしていたのです。正直、何をしていいか分からなかった。逆に言えば、勝手に動いたら、ちょっとしたトラブルになっていただろうから、そこに座っていてよかったんだけども、そういう状況でした。

もう一つの反省点は、イギリスに行ったのに、英語が聞けなかったんです。もちろん、話すこともできなかった。

ということで、さあ皆さん、外国に行ってテロリストと間違われた時のために英語の聞き取りの練習をしましょう……というのはもちろん冗談ですよ。冗談だけれども、とにかくセンター試験のリスニングの体験を皆でしてみましょう。

センター試験リスニング体験

センター試験のリスニングに関して、少し説明をします。

センター試験というのは、昔の共通1次の時代から変わって、もう四分の一世紀以上経っているんだけど、リスニング試験は、その中では比較的最近になって導入されたものです。ですから、皆さんのお父さんやお母さんは、センター試験の「リスニング」と言っても何だか分からない、体験したこともないと思います。センター試験のリスニングは今度の試験で10回目になります。

センター試験は、英語の聞き取りの試験の中でも極めて独特な方法を取っています。

「個別音源方式」と呼んでいますが、皆さんの資料袋の中にICプレーヤーが入っていると思います。それを一人ひとり、イヤ

ホンで聞くという形式です。センター試験の中でも、外国語という教科の英語…センター試験には、英語以外の外国語も、実はあるんだけど…、英語だけで実施をされているものです。センター試験の本番以外の時に、しかも、こんなに 1,000 人以上入るような会場でリスニングを体験することはないと思うので、珍しい機会だと思います。皆さんで試してみましょう。

ということで、これから画面を切り替えます。まだ、ちょっと待ってくださいね。準備をします。

さっきも説明がありましたが、実際のセンター試験では準備に 30 分、解答に 30 分、合計 1 時間かけます。だけれども、1 時間かかってしまうと講演の時間もなくなってしまうので、今日は一部分だけの体験をしてもらいます。

今、画面に、司会の泉さん…顔は映っていないんですけど…が映っていると思います。彼が、皆さんがやる作業と同じことをステージ上でやりますので、参考に見てみてください。実際のセンター試験では、こういうことをしてくれる人はいないので、そこところは実際とは違ってすみません。あと、今日は椅子が狭いでしょう。操作がしにくいと思いますが、我慢してください。

それでは、始めます。まず、資料袋から IC プレーヤーを取り出してください。私が指示するまでいじらないでください。袋から出したり、勝手に操作をしたりしてはいけません。いいですか？IC プレーヤーの袋の中に、音声メモリーが入っていることを確認してください。画面に映っていますね？これです。実際には、音声メモリーは

別に配布をされることになっています。

袋から出さずに、IC プレーヤー、イヤホン、音声メモリーがあることを確認してください。入っていない人は手を上げてください。いいですか？大丈夫ですね。

それでは次に参ります。これから、解答用紙の裏面の IC プレーヤーの準備方法を読んで、それぞれ IC プレーヤーの準備をしてもらいますが、まだ始めてはいけません。解答用紙を用意して、裏を上にしてください。画面、分かりますか？こちら側が裏面ですね。解答用紙の裏。

初めに、図の①から④までの作業を各自行ってもらいます。⑤から⑦は、私が指示をするまでは行ってはいけません。

それでは、IC プレーヤーを袋から取り出し、図の①から④までの作業を始めてください。分からないことがあれば、手を高く上げてください。画面で泉さんが操作をしていますので、それを見ながらでも結構です。機器交換担当の先生方、もし、手を上げた生徒がいましたら、操作の補助をお願いします。機器そのものに不具合があるようでしたら、交換してあげてください。

なお、イヤホンのコード、イヤホンのコード留め、それから音声メモリーが入っていたカバー、これらは返却の時に使いますので、IC プレーヤーの袋の中に入れておいてください。いいですか？捨てないで IC プレーヤーの袋の中に入れておいてくださいね。

(準備中)

そろそろ、どうでしょう？図の④までの作業が終わっていない人はいますか？手を

上げてください。大体終わったかな？ちょっと待ってね、まだ何人かいらっしゃるようなので。もう少し待ちましょう。

ちょっと余計なことを言います。センター試験の時には、おそらく、一つの教室に数十人ぐらいの環境で、丁寧に進めていきます。今日はちょっと時間が足りないので、かなり雑にやっています。追いついて行かない人、段々、追いついていくようにしてください。本番では、こういうことはありません。

では、大体、皆さんができたということにして、次に行きます。保護カバーが閉じられているかどうかを確認してください。閉じられていることを確認してください。これ以降、保護カバーは開けないでください。

さて、これから図の⑤の作業を各自で行ってもらいます。⑤の作業ですね。⑥、⑦は私が指示するまで行ってはいけません。…では、図の⑤を見ながら、IC プレーヤー裏側の絶縁シートを引き抜いてください。引き抜いた絶縁シートはIC プレーヤーの袋に入れておいてください。返却の時に使います。はい、引き抜きいてください。

絶縁シートを引き抜けないという人はいますか？大丈夫かな？

それでは先に行きますね。次に問題冊子の表紙を見てください。問題冊子の表紙と裏表紙の注意事項をよく読んでください。その際、問題冊子を開いてはいけません。質問があれば、手を高く上げてください。本当だと、ここで少し時間を取るんだけど、時間がないので、さくっと先に進んでしまいますね。よろしいでしょうか？ざっと眺めてください。

これから IC プレーヤーを操作してもらいます。いよいよ、です。まず、解答用紙の図の⑥ですね。この作業を各自で行ってもらいますが、⑦は私が指示するまで行ってはいけません。では、図の⑥を見ながら、電源ボタンを電源ランプが光るまで長く押し続けてください。電源ボタンを押すと、長押しすると、こういう形で光ります。よろしいでしょうか？電源ランプが光らない人、点滅している人はいませんか？いたら手を高く上げてください。…大丈夫かな？では次に行きます。

次に、私が指示をしたら、音声が出るかどうかを確認し、さらに聞きやすい音量に調節してもらいます。何か問題があった時は、音声の確認終了後に申し出を受け付けますので、それまで待っていてください。

そうそう、大事なことを言い忘れました。リスニングの試験の時っていうのは、音は絶対に出してはいけないんですね。だから、何か問題があっても、口に出して言葉で言う、ということはありません。全部ジェスチャーでやることになっています。ですから、何かあった時でも、終わるまで待っていてください。イヤホンが合わない人がいるかもしれませんが、交換するものがないので、手で押さえて聞くようにしてください。

それでは図の⑦を見て、音声の確認をしてください。…確認始め。やり方が分からないという人は、泉さんの操作を見てくださいね。

(確認中)

はい、そろそろかな？音声の確認が終わった後では、赤いランプが消えていますね。

この状態になっています。音声の確認ができていない人はいませんか？大丈夫ですか？これまでのところで何か問題があった人は手を高く上げてください。大丈夫ですね？

はい、それでは、今度は「解答用紙の表面を上にして、右上の注意事項をよく読んでください」というアナウンスが入りますが、今日はトラブルの対応はしませんので、ここは飛ばします。「読み終わっていない人は手を上げてください」というアナウンスが入ります。

次、大事な注意事項です。解答時間中に大きな騒音が発生するなど、事故が起こった場合でも私が中断の指示をしない限り解答を続けてください。本番でもこういうような手順になります。本番の場合は、この後に「解答開始時刻は何時何分、解答終了時刻は何時何分です」というアナウンスが入ります。

次のところに行きますね。IC プレーヤーには触れずに、解答用紙の右下の黒枠に囲まれたところを見てください。ここを見てください。「間もなく解答開始時刻になります」と私が指示をしたら、この内容に従って解答を始めてもらうことになります。いいですか？

今日はぜひぶん駆け足で説明をしましたが、本番ではもっとずっとゆっくり、皆さんが操作できていることをきちんと確認しながら進んでいくはずですよ。

よろしいでしょうか？今日は第1問というところまで解答をしてもらいます。音声はその後も続くんですけども、そこでやめてもらうことになります。問題用紙も第1問の部分しか渡していないと思います。

ということで、いよいよ開始になります。よろしいでしょうか。泉くん、準備、お願いします。

それでは、これから始めます。解答始め。



(解答中)

解答止め。鉛筆や消しゴムを置いて、問題冊子を閉じてください。

これから IC プレーヤーの片付けをします。IC プレーヤーはボリュームを最小にしておいてください。今、電源が入った状態だと思いますけれども、全ての問題が終わったら自動的に電源が切れます。

イヤホンを一度外して、イヤホンのコード留めを使って元通りに縛ってください。もしもコード留めがどこかにいっちゃった、なくなっちゃったという人がいたら、イヤホンがバラバラにならないように縛っておいてください。多分、分かると思いますけれども、こういう形で元通りに縛ってください。

次に、もう一度イヤホンと IC プレーヤーを付けてください。IC プレーヤーにイヤホンを付け直してください。その状態で、IC プレーヤーとイヤホンは、IC プレーヤーが元々入っていたビニールの袋に入れてくだ

さい。こういう形ですね。この講演が終了した後に、休み時間を取ります。その休み時間の時に回収箱に入れてもらいます。

音声メモリーは取り出さずに差し込んだままにしておいてください。それから、絶縁シートですね。先ほどの絶縁シートと音声メモリーが入っていたカバー。これも IC プレーヤーと一緒にビニール袋に入れておいてください。一緒に回収箱で回収します。

リスニングの体験はこれで終わります。

もう一度片付けに関して復習をします。よろしいでしょうか？リスニング機器は大学入試センターからお借りしているものですので、次の人が使うために返却をしなければなりません。こういう形に元通りにしてください。ただし、音声メモリーは差し込んだままにしておいてください。絶縁シート、音声メモリーのカバーは袋に入れてください。リスニングの機器はこの講演の後の休憩時間に袋に入れたまま回収箱に入れてもらいます。

なお、先ほど注意事項の中でもありましたけれども、正解を知りたい人が多いんじゃないかなと思うので、正解表は帰る時にアンケートと引き換えてもらってください。解答済みの解答用紙は持ち帰ってください。

それから、この時点でランプが点滅している IC プレーヤーがあるかもしれないんですけども、それは何か、音声メモリーを引き抜いちゃったとか、操作に失敗した可能性があります。本番の時にそういうことがないように気を付けてもらえればいいと思います。気にせずに、そのまま回収箱に入れてください。

それで、ちょっと補足的な注意事項なんですけれども、今日はかなり雑にやったの

で、もしかしたら、うまくできなかったという人がいるかもしれません。本番の時は、万が一、解答中にアクシデントがあったら「再開テスト」というのがあります。若干、不便があるかと思いますがけれども、不利にはならないように配慮されていますので、心配しないでください。

それから、リスニングの操作練習、「これではちょっと十分ではないな」という人は、大学入試センターのホームページでバーチャルな画面上の操作なんですけれども、操作ができるようになっています。そちらで練習をしてみてください。それでは、リスニングの体験はこれで終わります。

時代の要因、個別の要因

ということで、話を戻します。何かあまりにも非日常的な話でピンときていないかな、という気がするんですけども、再び 36 年前、1978 年のイギリスに戻ります。僕たち 4 人、なぜ、テロリストと間違われそうになったのか。実は、初めて行った外国というのは、留学のための渡航だったのです。だけど、留学のビザを持っていなかった。

こんな解説はいらないかもしれないんですけども、これは、私が、今、持っているパスポートの一つのページです。ビザってここに書いてあります。入国した日と出国した日のスタンプが押してあるんですけども、こういうようなところに「いつまでイギリスにいてもいいですよ」ということを表すスタンプをもらわなくてはいけなかった訳ですが、これがない状態だったんですね。

それでは、なぜ、そういう証明書も持た

ないままに、イギリスに入国しようとしたのだろう？・・・という話です。もちろん、私が未だかつてテロリストだったことはないので、そういうことじゃないんだけど。二つの要因があるのかな、と思います。一つは「時代の要因」です。もう一つは、僕らの「個別の要因」で、この個別の要因というのは時代に導かれたものかな、と思います。

おそらく、今のここまでの話を聞いてもピンとこないかな？と思います。「テロリスト」って分かると思うけど、今、テロリストだと「イスラム国」だとか「アルカイダ」っていうイメージがあるよね？よく報道されているから。怖いよね。ところが、1970年代っていうのは「日本人の若者＝テロリスト」というイメージがあったのですよ。信じられないでしょうけれども。でも、これは本当のことなんです。というのは、・・・もちろん、多くの人たちがテロリストだったわけではないけれども・・・、ごくごく一部の日本人が世界中でテロ事件を起こしていた、そういう時代だったのです。

もう一つ、時代的な背景があるのかな？と思うのは、若者が冒険というか、無謀なことをしても、ある程度、許されていた時代だったのかな？と思います。僕ら4人は留学を試みたかった。一種の冒険ですよ。外国でひとり暮らしを試みたかった。でも、今みたいに、色んな制度で留学ができるという時代じゃなかったのです。

そこで、個別の要因が挟まります。何があったかという、僕たちが育った北海道の田舎の旭川という町に、キリスト教の宣教師が来たんですね。高校生を勧誘していたんです。「キリスト教の勉強をするために、

イギリスに行ってみないか」と。「教会においで」というようなことで。当時は、外国人って、街中でほとんど見たことがなかった。外国人を間近で見たのは、・・・幼稚園がミッション系の学校だったので、先生の中に、「シスター」と呼ばれる外国人がいたことはいたんだけど・・・幼稚園以来ということだったでしょうか。

この話に私たちは乗ったわけですね。「イギリスでキリスト教の勉強をする」ということを建前として、留学をするというようなことで。その宣教師が、個人的に受け入れの学校だとか、ホームステイ先だとか、教会とかに連絡をして、受け入れの手紙をもらっていたんですけれども、正式の留学の証明書がない状況だった。

楽しかった「冒険」

最終的には誤解が解けて、無事に入国することになりました。まあ、そのことにまつわる話もいろいろありますが、省略して話を先に進めます。

これは、イギリスの地図です。イギリスは四つの地域に分かれていて、イングランド、スコットランド・・・最近、独立の是非に関する投票があったりしたところだけど・・・アイルランドがあって、もう一つ、ウェールズというのがこの小さいところなんですけれども、ここに行くことになったんですね。ウェールズのスウォンジー市という10万人ぐらいの街だったでしょうか。

まあ、空港で痛い目にあったので、とにかく英語をしゃべれるようにならないと帰れないかな？と思って、一生懸命、会話はしました。聞き取れるまでに大体3ヶ月、話せるまでに大体6ヶ月ぐらいかかったか

なと思います。

個別の要因(2)

- 誤解は解けて無事に入国
→ ウェールズ州スウォンジー市に
- 英語は話せるように
- 聞きとれるまで3か月
- 話せるまで6か月
- サッカーとラグビー



2014/11/12 地元って何だろ？き筑前市民会館 24

やっぱり、スポーツ。せっかくイギリスに行ったから見てみたかったんだけども、「サッカーは危ないから行ってはいけない」と言われたんです。フリーガンに巻き込まれるから。そのホームステイ先のアドバイスは忠実に守りました。その頃だから、他のスポーツと言うと、ラグビーが盛んだったのでラグビーをよく見に行きました。

もう古い話なので、何か皆さんに見せられるものがないかなと思って、昨夜、家の中をごそごと探していたら、いくつか、お見せできそうなものが出てきたので、こんな話をしているんですけども。これがその時の街の地図ですね。それとこれ。サッカーに行つてはいけないと言われたんだけども、一応、やっぱり何かお土産がほしいなと思って。多分、街のスポーツ用品店で、自分で買ったんだと思うんですけどもタオルマフラーです。こんなのが出てきました。あの当時、スウォンジーシティってチームは弱くて、多分、3部リーグぐらいだったはずなんですけれども、2〜3年ぐらい前からは、プレミアリーグに昇格していますよね。何だか、時代が変わった

なと思います。やっぱり、見に行きたかったな、と思うんだけども。

代わりにラグビーはアマチュアのスポーツで、危ないことがないから「行ってもいいよ」と言われたので、水曜日の夜、よく1人で出かけました。水曜日に試合をやっていたんですけども、その頃のマッチデープログラム、探していたら出てきたので、お見せしようかなと思って持ってきました。ここに何かサインがありますね。何だかよく覚えてないんですけども、有名な選手がいたんでしょうかね、サインをもらっていました。

日本に帰る時に「君はラグビーが好きだから、お土産をあげる」と言われてもらったネクタイです。この当時、ウェールズは強かったんですね。「5ヶ国対抗」というイギリスの地域対抗のリーグ戦、さっきの四つの地域にフランスが入って、…今は6ヶ国になっていると思うんですけども、イタリアが入って…3連覇していたので、その時のエンブレムが入ったネクタイをもらいました¹。今日は押し入れの中から探して見つけてきて、今、しているんですけども。こんな感じです。

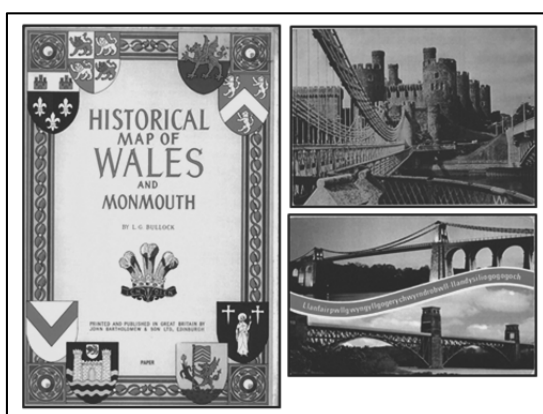
正直、楽しかったですね。

その後、さらに調子に乗りました。イギリスの国内をヒッチハイクで旅行しました。ヒッチハイクって分かる？こうやって手を上げて、知らない人の車を停めて乗せてもらうんですけども。「サッカーは危ないから見に行つてはいけない」と言われたんだけども、ヒッチハイクは止められなかった。というのは、その頃は、多分、そういうこ

¹ 正確には4年連続のトリプルクラウン(イングランド、スコットランド、アイルランドに全勝)を記念してのエンブレムだったようである。

とって、結構、普通にやっていたんだね。だから、その中で、例えば、路線バスに停まってもらったり、「兵員輸送車」って分かるかな？兵隊さんがいっぱい乗っている軍の車を停めて、その中に乗せてもらったり…。

あとは、乗せてくれた老夫婦に英語が通じない、ということもありました。それは、ウェールズ語の地域っていうのがあったんですね。これはウェールズのイラスト・マップなんだけれども、「何かテーマがなくてはいけなかな？」と思って、お城を巡ったりして。当時はお金もなかったんで、何かお土産が欲しいということで、絵ハガキをずいぶん集めたりしていたんですね。それが、ぼろっと出てきたので、お見せしようかなと思ったんですけれども。このお城と同じアングルで写真を撮ったのを覚えています。あとは、これがウェールズ語の地名なんです。英語と全然違って、一つの単語がすごく長いんですね。発音も全然違ってきます。



まあ、こんなことをやったり、田舎でぼつんと降ろされて、どこにも行くところがないので、羊の牧場に頼んでテントを張っ

て泊まらせてもらったり…というようなことをしていました。何となく、歩きながら、「大人になったときに今日の出来事を思い出すことなんかあるのかな」と思ったりしたことを思い出しました。

楽しい冒険だったんだけど、多分、それで結果的に成長できた部分もあったかな、と思います。きっとね。

「人口学」から見えてくること

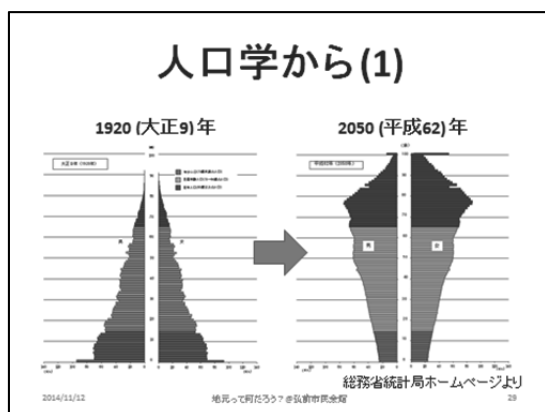
でも、この話はここで終わってはいけないのです。というのは、皆さんは、絶対、私の真似してはいけないからです。なぜでしょう。それは、本当に生きて帰れなくても不思議ではないくらい、危ないことをしていたからです。

例えば、宣教師に誘われて教会に行って、「基督教の勉強をするからイギリスに行きなさい」なんて…。これは、怪しい宗教の勧誘の仕方と同じですよ。たまたま、いい人だったから、すごく楽しいだけで帰ってこられたけれども。あとは、知らない人の車に乗せてもらうなんていうことは、今では考えられないですね。

そこで、少し考えてみました。自分が高校生だった時には、何でそんなことができたのだろう、と。「人口学」という学問をヒントにちょっとお話ししたいと思います。

これ、見たことあるかな？人口ピラミッドと言うんだけど、日本の1920年の人口構成を表したものです。左側が男性、右側が女性なんですけれども、各年齢の人数の分布を表しています。人は生まれてから少しずつ亡くなっていくので、こういう三角形の形をしています。だから「ピラミッド」と呼ばれるわけなのでしょう。

ところが、これが今から 36 年後、2050 年にはどうなっているかという、こういう形になります。皆さん、今、16~7 歳だから、ここの所になります。この図で見ると、今から 36 年後なので、皆さんは私と同じぐらいの年齢になっています。50 歳代前半ですね。ここです。私は、今、53 歳なので、この図では、どこに当たるかというと・・・存在していたら、このあたりのはずなんだけれども・・・ちょっと存在している自信はないかな？とは思いますが、すけれどもね。



これはピラミッドじゃないよね、どう見ても。こんな形になってしまうのは。ただ、いわゆる「少子高齢化」という現象を図にするとこうになってしまうわけです。今から 36 年後の未来、日本の人口は約 9,000 万人にまで減ってしまうと言われています。高齢化率、65 歳以上の人口の割合が 40% ぐらいだそうです。

もう一つ、衝撃的な発表が 5 月ぐらいにありました。日本創世会議というところが、「消滅可能性都市」というような表現で日本の将来予測を発表したんですね。これは、10 年ずれているんだけれども、2040 年に全国で 896 の自治体がなくなる、という予

測です。このままで行くと、青森県では 87.5% の自治体が消滅する可能性がある、という予測が出ました。残念ながら、弘前も消滅する自治体に入っています。

地元で平穏に一生を送ること。昔はそうだったし、今でも、当然、人間としての幸福の原点だと、私は思っています。ところが、今の時代は矛盾しています。と言うのは、大変な核家族化、少子化が進んでいる。多くの人は、地元から離れて暮らさなくては行けない運命にあります。地元・・・その定義は色々だと思いますけれども・・・自分の生まれ育った家から外に出て、外の世界で暮らす、というのは一種の冒険なんですよ。でも、その冒険ができていく時代なのです。なぜでしょうか？もうちょっと考えてみましょう。

平均余命とか、平均寿命とかを出す「生命表」というものが、人口学ではあるそうです。それに基づくと、「生まれた赤ちゃんが何歳まで生きる確率が何%」という数値が計算できます。男性と女性でちょっと違うのですが、女性の場合を例にとって資料を見てみると、さっきお見せした「人口ピラミッド」の 1920 年代前半だと、20 歳まで生きる人というのは 69.5%、7 割を切っていました。もっと近い年が探せなかったもので、自分自身よりは少し前の世代になってしまうんだけれども、1955 年生まれだと 93.5% という数値になります。

今はどうでしょうか。1997 年生まれの人はいるかな？ちょっと前かな？皆さんよりは。1997 年生まれでは 20 歳まで生きる人が 99.2% という数値になっています。

考えてみましょう。昔は生まれた赤ちゃんの中で、3 割の人は 20 歳まで生きられな

かったんです。私の時代はどうかというと、もうちょっとましだけれども、20 人生まれたら、そのうちの一人ぐらいは、残念ながら成人に達する前に死んでしまっていた。今は、20 歳より前に亡くなる人は 100 人中 1 人もいない。皆、当たり前のように大人になっていく。当たり前のように寿命が尽きるまで生きるわけです。

当然、子供が亡くなるという不幸は、親も周囲の人たちにとっても悲しい出来事です。それは、昔も今も変わらない。ただ、わりと「起こりうる可能性がある時代」と、あってはならない、「あり得ない時代」。この違いは大きいのかな？…と思います。

グローバル化と冒険

こう言うては何だけど、何となくの感覚ですが、やっぱり「冒険」って危険なことです。経験して、それによって成長もするんだけれども、危ない。

時代によって「冒険」をどこまで許容できるのか。この違いがどこに表れているかというと、心理学の概念で説明できそうです。社会学の研究から出てきた「相対的剥奪」という概念があります。一言でいうと、定義は色々あるんだろうけど「自分だけの不幸って人は耐えられない」ということです。自分だけの不幸…。だから、皆さん、絶対、死んではいけない。不幸にはなっはいけない。難しいよね。

冒険ってやっぱり人を成長させると思う。でも、今の時代、万が一でも、「一人くらい亡くなってもいい」なんていうことはできない。「冒険による成長」と「安心、安全」をどう両立させるのかということを偉い人たちは考えた。これが「センター試験のリ

スニング」というアイデアに繋がったのかもしれない。

まず、過疎化が加速していくだろう。これからは、「地元」が縮小していく。グローバル化になっていくので、世界も縮小していく。ということは、外国人との交流ということが重要になってくるよね、という話なんですよ、きっと。ということで、文部科学省では、2003 年から「英語が使える日本人育成のための行動計画」というのを立てて、その一環としてセンター試験にリスニングも導入されたというのが、僕の理解です。さっきやってもらったよね、リスニングの体験。これだけではきっと役には立たない。何の役にも立たないでしょう。ただ、これをきっかけに皆さん英語を勉強してくれるでしょう。そんなことが考えられているのではないかと思います。

「ちょっと待てよ」と。「自分はそう言ったって、どう考えたって、グローバルとか言われても、地元が一番大事だよ」…。その通りだと思います。それが原点。でも、「今のままではいけない」というのも事実なんでしょう、地元に残って地元を盛り上げるためには。人がどんどんいなくなっちゃうんだよ、住めなくなっちゃうんだよ、だから、外の人を受け入れなければいけない。受け入れる人は日本人とは限らないわけです。外国の人かもしれない。

地元で役立つ人になりたい。こういう気持ちを皆さんも持っていると思います。共有してくれていると思います。そのためには、それでもやっぱり、ちょっとした「冒険」みたいなものが必要だと思いませんか？今の自分を越えられるような。今、当たり前と思っていることを相対化して見ら

れる視野を持つために。ということで、おそらく「外の世界をちょっと体験して帰ってくる」のはいいことなのかな、と思います。幸いにして、例えば、今、今日の話は「遊学」というテーマだったけれども、それ以外のことでも「ちょっと外の世界を見に来る」ということに関して、比較的安全にできる手段というのが、昔よりもずいぶん広がっていると思うんですよね。あとは勇気を出して、ちょっとした「冒険」をやってみようと思うかどうか。

だから、最後にお伝えしたいのは、やっぱり、世界共通言語としての英語はどう考えても、多分、必要になるだろうということです。だから、勉強しましょう。しょうがないです。苦手だと言っている、これからの社会では逃れられないと思います。ただ、英語はあくまでも手段ですけど。

講演のタイトルに「遊学」と付けました。命がけというほど危なくない範囲での小さな冒険を、皆さんもしてみてもうかがうか。

ということで、私の話を終わろうと思います。ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

地元へ帰ろう

仙台医療センター附属仙台看護助産学校 教員 小松 恵



はじめに

こんにちは。じゃあ皆さん、曲をまず聞いてもらいたいと思います。これ、覚えているかな？

(音楽)

少し前の連続テレビ小説の挿入歌です。とっても面白いドラマでしたよね。私は久しぶりに放送を楽しみに待った番組でした。それで、今回、この講演の依頼を受けてから、このサビの部分ずっと頭の中でリフレインしていました。今回、この依頼を受けて、「地元って何だろう、じゃあ、私にとっての地元ってどこ何だろう」と考えました。そういう話をします。私はUターンをした人なんですね。そのUターンした話などを、今日はしていきたいと思います。

渡米と帰国のいきさつ

まず、自己紹介をします。私は岩手県生まれです。そして、昔の国立病院、仙台病院というところの附属の看護学校を卒業して、そのまま病院に15年勤務しました。今は、この病院は仙台医療センターといいます。楽天のkoboスタのすぐ隣にある病院です。

そして、そこの病院を15年務めた後に、何を思ったか渡米しました。私が移り住んだところはアメリカの東海岸のニューヨークというところに行きました。ここに、…今はもう皆さんスマホを持っているので、地下鉄の地図とかってもらわなくても済むと思うんですけども、これはニューヨークに観光旅行に行くと、どこの駅に行ってももらえると思います…この地図で説明します。



まず、私が住んでいたところは…ハーレムって聞いたことありますか？黒人の文化のあるところなんですけれども…私が通っていた大学がマンハッタンの南側にあり

ました。そして、研修を受けていた病院がこのセントルークス病院というところなんですけれども、ほとんどハーレムに近いところです。ここは、コロンビア大学のティーチングホスピタルというところで、ここで研修を受けています。

そして、皆さんがよく聞いたことがあるのはこのセントラルパーク。聞いたことがありますよね？そして、毎年、冬に新年のカウントダウンをするところがここ、タイムズスクエア。タイムズスクエアというところはマンハッタンの真ん中辺りに位置します。

そして、私がその後どうやって渡米したかという、まず、私は学生になりました。先ほど、「倉元先生はビザを持たずに行った」という冒険のお話でしたけれども、私はとりあえず学生ビザを取得しました。そして、大学の語学学校に通いながら、先ほどの病院でボランティアをしながら研修を受けました。これが概観です。この病院のすぐ裏が、コロンビア大学になっています。「セントルークス」って書いてあるんですけども、これは日本語でいうと聖路加病院なんです。なので、日本の聖路加からも研修の人たちが来ていました。

そして、ここで何をしていたかというと、今はエボラ出血熱やデング熱など話題になっていますけれども、感染の病気の管理、感染看護についてのところで研修を受けていました。そして、その後、私は HIV / エイズに苦しむ人たちのために、その方々を支援する非営利団体に勤めました。そこで、特にエイズで苦しんでいるアフリカにお医者さんとか看護師さんを送って、医療にアクセスしたことの無い人に、無料の診療所

を作るみたいなお仕事。事務的なお仕事に携わりました。そこで私も働きました。

こういうスラムって聞いたことがありますか？人が不法に占拠をして、住み続けているところなんですね。ここには電気とか水道がありません。ここに住んでいる人たちはもしかすると一生に一度もお医者さんにかかるという経験のない人たちなんですね。なので、そういう人たちに医療の機会を与えるというお仕事をしていました。そしてこういうふうに、これが私なんですけれども、この人がスラム出身の人なんですけれども、私の護衛についてくれた人です。私は「ここを一人では歩いてはいけない」と言われました。これは、スラムの近くにある病院なんですけれども、赤ちゃんがこのように寝ているというのは日本では考えられないよね。ちゃんと一人ひとりのベッドに寝ているはずですよ。でも、私が行った病院には、日本では考えられないような施設でみんな入院していたり、治療していたりしました。

そして、色んな事務的なことをやっていたんですけども、どうしても私は臨床、つまり患者さんに携わる仕事がしたいと思いました。それで、いくら日本で看護師の免許を持っていたとしても、アメリカではアメリカの免許がないと医療的な行為ができないんです。そこで私はやはりアメリカでちゃんと看護師にならなくてはいけないと思ってアメリカの正看、これを RN とよく略すんですけども、Registered Nurse のライセンスを取得することにしました。これがニューヨーク州のライセンスの合格証なんですけれども、アメリカっていう国は、州ごとに全部違うんです。なので、国家試験

といっても州単位で申請したり、合格したりします。これが、向こうの免許証になります。

そして、ライセンスを取得して、働くという選択もあったんですけども、私の場合は永住を希望していたわけではないんですね。それで、働けるビザが切れたので、私は2007年に帰国しました。2008年の4月からは、東北大学大学院の、医学系研究科に入学して、修士を修了しました。そして、修士の最中に前務めていた病院に再就職をして、そして一昨年の4月から私が卒業した看護学校で教員として働き始めました。そして今年の10月から東北大学大学院の教育情報学の教育部の博士課程に入学して現在に至ります。

37歳の転機

今回、地元に戻ってきてからの話の前に、なぜ私が渡米をしたのか。私は37歳で渡米をしました。その話をしてからUターンをした話をしたいと思います。それは私が看護師になる前。もう30年以上も前、高校時代にさかのぼります。私は大学受験を全部失敗しました。四つ受けて四つ落ちました。そして滑り止めの看護学校1校しか受かりませんでした。それで、親から無理矢理行けといわれて、しぶしぶ看護学校に入学して、卒業しました。そして、いつか辞めるつもりで看護師になりました。

しかし、最初に配属された脳外科の病棟で、とても素晴らしい先輩ナースや、お医者さんたちと出会って、この職業には何かがあると感じるようになりました。ちょっと、すごい古い写真なんですけれども、見てください。ちょっと今の看護師さんと違

うでしょう。何か古い、もう白黒っていったところすでに30年前なんですけれども、どこに私がいるでしょう。ここです。こんなに昔の話です。

37歳で渡米する前に、看護師としてはお金を稼ぐ手段でした。でも、それでも素晴らしい仲間に出会った。なんてこの人たちはすごいんだろうという人たちと出会っていく中で、少しでも私はいい看護師さんになりたいなって、意識が変わっていったということも事実です。一生懸命とりあえず働いたんだと思います。そしてね、誰にも文句も言われずに、仕事をそつなくこなして、お金も自由に使えるようになりました。

そして、人は私を3割増しで見るようになります。でも、そこで私はそういう状況にとっても耐えられなくなってきたんです。何かが足りない。このままでいいのかわなくて。何かもう焦りにも似た気持ちになってしまったんですね。なんでなんだろうって。

私はやりたいことって何だったんだろうって、その時考えたんですね。私のやりたいことって。そしてその時に、私の心の中に浮かんできたのが、中学生で初めて英語を習った時に、英語をしゃべれるようになりたいなって。そして、いつか外国に住みたいって。その時多分、何々がしたいって思ったのはこれが初めてだったと思います。その時、私は中学校の時に、初めて描いた夢を、今、やらないと駄目だなって思っちゃったんですね。

それで、みんなのお父さんとかお母さんの年代の方だったらご存じだと思うんですけども、私はあるイギリスのロックグループに夢中になったのね。クイーンっていうんだけど、くしくもそのボーカリス

トだったフレディー・マキュリーっていう人がエイズで亡くなっちゃっているんだけど、私は「クイーンのマネージャーになりたい」とかって親に言っていたみたいなんです。「すごいわけのわからないことを言う子だな」と思われていたんだけど、「そういえば私あれがしたいんだな」って思いがよみがえったということがありました。

ただ、この思いだけではなかったんですね。私の渡米を後押ししたものがあんです。それは大きくわけて三つあるんですけども、母親の死だったんですね。私の母親は、私が看護学校に入る頃から体調を崩していて、入退院を繰り返していました。そして、今平均余命女性は90歳近くなんですけれども、私の母は60歳になる前に亡くなってしまいました。

次に、私は30年近く看護師をしているので、多くの人たちの死に立ち合います。その方々は全て、生きたくても生きられなかったんです。その人たちの思いをずっと見てきました。

さらに、私の看護学校の同級生が、私が渡米するって決めたその時にがんが見つかったんですね。そして私がニューヨークに降り立って、4ヶ月目に彼女は亡くなってしまいました。その時、色んなことを考えたんですけども、「明日が必ず来るってのは限らないんだな」って思ったんですね。だから、「今、やりたいこと、今が大事なんだ」ってつくづく思いました。

そういう思いとかが私を後押しして、37歳って言ったら、普通は落ち着く年代です。それなのに無茶なことをしてしまった。そういう経緯があります。

離れて気付く地元の良さ

ちょっと重たい話になっちゃったんですけども、地元についての話に戻ります。私は生まれてから高校を卒業するまで同じ町内に住みました。18年間。引っ越しを2回したぐらいかな。そしてその後看護学校に移って、仙台も18年間です。看護学校は、病院の敷地内にありました。だから、すぐ病院のわきのアパートを借りていたので、ここも18年間、ほとんど移動せずに暮らしました。仙台の中でも同じ町内です。

そして、どういうわけかいきなりニューヨークに行ってしまいました。ニューヨークには8年ちょっと住みました。ただ、ニューヨークでは、なかなかいいアパートが見つからなくて、8年間の間に5回も引っ越しをしました。

そしてビザが切れたので、帰らなくちゃいけないなと思った時に、私どこに帰ったらいいんだろうと思いました。

最初に浮かんだのはやっぱり東京です。東京は働くための条件の良い就職先はいっぱいありました。束縛されずに、自由に生きていけるのはニューヨークと同じです。特に、海外で暮らして自由を謳歌した人にとって、田舎の暮らし、人々の目がきついとか、色んなルールがあるところは辛い、とみんながよく言います。

でも、私は仙台に戻ったんです。なぜだったんでしょう。戻りたいと思った仙台ってどういう場所だったんだろう。そこに何があったのかなって考えてみました。そして、離れて初めて気付く良さなのかなって思いました。

私は離れて気付いた良さ、三つ発見しました。これは私の場合なんです。人それぞれ

れ違うと思うんですけれども。まず、ひとつが実家。家っていいなって思ったこと。二つ目が仙台の友人や、それまでの仕事のことです。そして、三つ目が日本。みんなは日本に暮らしているからこんなの当たり前だって思うけれども、離れて初めて日本の良さに気付きました。それを今、これはちょっと詳しく話します。

離れてみて、初めて気がつく良さがある

私の場合・・・

- 1. 実家の良さ**（高校卒業後、初めて親元を離れた時）
- 2. 仙台の友人やそれまでの仕事**（初めて片道切符でのフライト）
- 3. 日本の素晴らしさ**（困難を極めたNYでの生活） ●

まず、家に帰りたと思ったのは、私は看護学校に入って、寮に暮らしました。あの当時は四人部屋でした。本当に他人と四人部屋で暮らすということが辛くてたまりませんでした。いつも夕方になると、仙台と一関のJRの乗車券代・・・確か1,090円だったと思うんです・・・いつも、握りしめていました。そして外を見ては泣いていたんです。あれだけ親と喧嘩して、「馬鹿野郎」とか、「くそばばあ」とか「くそじい」とか言っていた人が、家に帰りたくて仕方がなかったんです。よく夕日を見るとセンチメンタルになりますよね。特に、よその土地で見る夕日って、人を悲しくさせるものがあるんですけれども、どうしても、私は夕方になると家に帰りたという衝動を抑えるのに半年ぐらいかかりました。「ああ、わがまま言えるのが家だったんだなあ」と気付きました。

次に、片道切符の意味ということなんですけれども、アメリカに入国する場合、旅行の時には必ず往復の航空券がないと入国させてくれないんですね。必ず帰るということが前提だから。ところが、ビザを持っている人は、片道切符でいいんですね。

それまでは結構遊びにちょこちょこ色々な国に行っていて、いつも私は成田空港に行くとかわくわくしていたんです。そして、飛行機に乗るといって、いつもにやにやして離陸の瞬間なんていうのはもう、本当に心躍る瞬間だったんですね。ところが、その日、私がニューヨークに片道切符を持って旅立つ時のフライトは、今までとは全然違いました。離陸の瞬間って、飛行機に乗った方はわかると思うんですけれども、ガーッと重力がかかりますよね。さあ今から飛び立つという瞬間を感じた時に、私は涙が止まらなくなりました。何で泣けるのかはわからないんですけれども、とにかく号泣しました。恥ずかしくてしょうがないので、ブランケットをかぶってJFK、ニューヨークの国際空港に着くまで、ずっと泣き続けていました。

それは何かというと、「遊びに行くんじゃないんだ」と。「次、帰ってくる日がわからない」って、そういうことを、重力を感じた瞬間、心に浮かんだものがあつたんですね。「とんでもないことをしてしまった」って。「これから私ってどうなるの」っていう、言いようのない不安でした。

それと、大事なものを捨ててしまったのかなという後悔なんです。この大事なものが、私にとってはきっと友人、家族、そして自分が思っていた、嫌だと思った時もあったんですけれども、仕事だったんだと思

うんです。そして、私の友人や家族は、心配はしました。私の決断を。ただし、反対はしなかったんですね。「しょうがないね、いってらっしゃい。嫌になったらいつでも戻っておいで。」って言って送り出してくれたんですね。だからこそ、自分は捨ててしまったんじゃないかという後悔にすごく苛まれました。何でこういう思いになったのか、今でもちょっと思い出すと泣けてきちゃうんですね。あの時のことを思い出すと。

異文化の暮らし

その後、なんだかんだ言って新しい生活が始まりました。異文化。全く違う文化でした。ニューヨークって聞くと、きらびやかな、世界の人々を魅了する活気にあふれた街って。テレビに映るニューヨークって、何となくきらびやかでカッコいいでしょう。でも、やっぱり街にはふたつの面があるんだよね。表の部分と裏の部分。遊びに行くニューヨークと、住むニューヨークは全く違っていました。観光で見せる姿と、生活するところは全く違うということです。

ここもニューヨークなんです。私が住んだハーレムっていうのはこういうところです。ここをちょっと、別に危険とかそういうわけではなくて、一歩二歩、通りをひとつ違うだけで、様相はガラッと変わります。

そして、覚悟して行ったつもりだったんですけど、先ほど倉元先生もしゃべれない、聞けないっておっしゃいましたけれども、私の場合は聞けない、しゃべれない、書けない、読めない。この四重苦です。「本当にどうしちゃったんだろう」と。

例えば、さっき言ったように、タイムズスクエアのところでマクドナルドを買うの

は誰でもできるんです。観光客が多いから。ところが、私が住んでいるところに観光客とかあまり来ないので、私のしゃべる英語を聞き取ってくれないんです。お店の人は。その時、私は、「ハンバーガーも買えない人になったんだな」と思って泣きました。

そして、学校で色々勉強もしました。これがニューヨーク大学でのスピーチのクラスの写真なんですけれども、私このクラスの成績がものすごく悪かったです。本当にしゃべりが苦手で、会話ってやっぱり反射なんですね。私はいつも考えるんです。話をする前に。だから、なかなか会話にならずに、本当に苦労しました。



結局は何で英語を覚えたかっていうと、よく言うんですけどもオンザストリート (on the street) って言って、街の中で覚えるんです。確かにクラスで基礎を学ぶのも必要ですが、ほとんど買い物をするとか、生活に必要な中で英語を覚えていくんだと思います。例えば、いつもパック詰めになっていたお肉を買っていたんでは、いつまでも自分の欲しい量、欲しい形、欲しいようなお肉はもらえないでしょう。だから、対面でお買い物をするようにしました。そして汗をかきながら、「私は脂身を外してほしい」とか、「何インチにスライスしてほしい」

い」とか、そういうことを無理矢理言いながら英語を覚えていきました。でも、お肉の買い方なんて、大学では教えてくれないでしょう？でも、生活するという時には文法も必要だけれども、実際食べていくためのものを買うということも必要でした。そういうことで、なかなか異文化に暮らすということは大変なことでもありました。

そして、違いを受け入れられずに、葛藤する中で、私がしていたことといえば、慣れ親しんでいた生活との比較ばかりでした。「日本だったら、こんなこと絶対ないよね。なんなのニューヨークって。」いつも文句ばかり言うていました。そして、次第に愛国心の塊になっていって、日本では当たり前だと思っていたことが、実はすごいことだったということに気付くようになりました。

私にとっての「地元」

そして、私が今帰ってきて言えることが、日本、特に仙台がいいなと思ったのが、まず、日本はどこに行ってもきれいです。私は清潔好き世界一だと思っています。それと、新鮮でおいしい食べ物。生で物が食べられるって相当な衛生観念なんです。それと整ったシステム。みんなはいつも整ったシステムの中にいるから、この素晴らしさが分からないと思うんですけども、まずニューヨークの地下鉄には時刻表がありません。いつ来るかわかりません。例えば、うちの電球が壊れた、何かが壊れた、「直してください」って電話をしても、いつ来るかわかりません。「OK」って言うてくれるけれども、待てど暮らせど、直してくれる人は来ないんですね。電話をしても、何をしても、どんどん後回しにされていく。例

えば何かの書類をもらいたいといってオフィスに行く。それも自分の手元に来るのには何か月もかかるんです。そういうところなんですけれども、それでも社会としてはちゃんと成り立っていくんですね。

だから日本に帰ってきた時に、私は仙台の市役所でびっくりしたんです。たった一日で保険証から住民登録から全部できたんです。そして、私が素晴らしいっていうふうに事務のお姉さんに言ったら、「これでも遅いって叱られるんですよ」って市役所の人が言うていたんです。「いやいや、こんなに素晴らしいところはありません」って私、本当に日本のシステムの良さにびっくりしたんです。私はビザをなくされたんですね、アメリカの移民局に。その自分のステータスを回復するのに2年半かかったんです。そういう経験をする、仙台の市役所が私を30分待たせたことなんて、全然平気でした。これぐらい日本のシステムってすごい整っています。

あとは、信頼できる素朴な人たち。お金を取られない、ましてや夜一人で歩いても殺されない。これってすごいことなんです。安全って、お金で買うものだったんです、向こうに行って分かりました。でも、ここにいる、みんな安全でいるから、ただだと思っているのでしょうか？ただじゃないんです。日本もこの頃ちょっと物騒な事件とかも多いんですけども、多分、海外に暮らせば、日本みたいにしていたら身ぐるみはがされてしまうところもあります。みんながみんな、全部そうじゃないですけども。

あとは、全ての意味で豊かだった仕事って。やっぱり私を作ったのは看護という仕事だと思うんですね。嫌で仕方がない仕事

だったんだけど、仕事をしなくなるとまた仕事ってしたくなるんです。しくて、たまらなくなるんです。でも、私にはビザのステータスを回復するまでに時間がかかったんで、実務をすることができなかったんですね。その時に初めて仕事の大切さっていうものに気付きました。

そんなこんなで、色んな大変な思いもしたんですけど、やっぱり住めば都なんです。新しい環境に慣れて、新しい文化を受け入れていく過程を経験するっていうことは、とても大事なことだと思います。そして、離れて初めてわかる地元の良さと同じように、「自分にはこんな一面があるんだな」ということを知ることができるんです。同じ環境で、同じような考えをして、ずっとみんなで同じようにしていたら、自分の別な面とかがって、まず見る機会がないと思います。だって、そのまんまでいいですもの。

多分、平和なうちはいいいんだと思います、それで。ただ、状況が変わってきた時に、ずっとそれをしていると、急激な変化にちょっと戸惑う人が多いのかもしれない。多分、適応っていう過程を繰り返すっていうことは、成長につながるんじゃないかなと、私も倉元先生の意見に同感です。

そして、私にとっての地元って考えた時に、生まれ故郷に親が生きていてくれれば、そこが私の地元だったかもしれません。残念ながら私の両親はもう亡くなっています。看護学生時代に苦楽を共にした友人と、仕事を通じて仲間になった人たちが待っていてくれたところが地元。仙台でした。そして、長く住んだ場所というよりは、自分が頑張った記憶のある場所で、一緒に頑張っ

た人が住んでいる。そのところが私にとっての地元だったような気がします。

人生の先輩。これは私のさっき白黒の写真に写っていた師長さんが言ってくれた言葉なんですけれども「人は一番いいところに戻ってくるんだ」と。その人は山形の人なんですけれども、山形弁で言いました。「そうだな」って私も思いました。良いっていう中身は人それぞれ違うかもしれませんが。私にとっての「良い」は、今、申し上げた内容だったんだと思います。

私にとっての地元とは？

- ・生まれ故郷に親が生きていれば、そこが地元だったかもしれない。
- ・看護学生時代に苦楽を共にした友人と、仕事を通じて仲間になった人達が待っていてくれた所が地元だった。
- ・長く住んだ場所というより、自分が頑張った記憶のある場所で、一緒に頑張った人が住んでいる場所だった。

リバーズ・カルチャー・ショック

帰国して7年たちます。U ターンして思うことがあります。私は…皆さん「バブル世代」ってご存知ですか？…私の年代は、日本の経済が右肩上がりでした。とても、お金の回りやすい時代でした。そして、ちょうど私が渡米したのが、バブルが終わる頃だったんです。それでもまだ私は、バブルの名残でした。そして約10年。日本の経済がガタガタと落ちていったその状況を私は知りませんでした。そして帰ってきたらデフレ。ものすごくお金が動かない、物が安くなっている時代になっていました。

だから、さっき笑ってお話したんですね、控室で。「牛丼が280円だってびっくりした」とか、「お弁当が250円で買えるって

どういうこと」って。すごい私にとってはびっくりしたことなんです。そして、なんていうか「どんどん日本が貧しくなっていくんじゃないのかな？」っていうような不安に駆られたということを覚えています。

あとは、団塊の世代。みんなの世代から言ったら、おじいちゃん、おばあちゃん。祖父母の時代に近くなっているかもしれませんね。その団塊世代と比べて、私は看護学校で皆さんと同じ世代の学生と接していることがあります。少子、つまり、一人か二人ぐらいしか、一人の人が産まない時代の子供たち、学生と接して思うことがあります。多分、みんなは、競争しなくてもこれまで済んできたんだと思います。人との差というものにちょっと弱いかもしれないです。本当は人っていうのは、同じはあり得ないと思うんですね。人それぞれ違います。でも、みんな同じでいようって。それがいいっていう風潮があるような気がするんですけども。あとは求めなくても、全てが目の前にあるでしょう？だから、あまり私の世代みたいに、兄弟が多くて育つとか、そういう環境にないので、そういう生存競争みたいなことを考えたことがないんだと思います。

でも、この豊かさって何かなって考えた時には、私たちの親世代からちょっと上の人。みんなの祖父母世代が一生懸命頑張って、日本のために頑張ってくれた、その世代の人たちが勝ち取ってくれたものを、私たちが、今、引き継いでいるだけなんですよね。そこにちょっと気付けなくなっているかもしれないなど、私はちょっと心配しているんですね。

他国、色んな国の人。ニューヨークは「メ

ルディング・ポット」という、色んなもう100何十ヶ国の人たちが集まるなかで、色んな国の人を見てきた時に、「日本人はやっぱりお公家様だな」って思った時がある。人と競争しないで、独自の文化、島国の中で育ってきた遺伝子がずっとそうさせるんだと思うんだけど、「生き抜くというか、タフさにすごく欠けてきたかな？」と。きっと私の親世代はそうではなかったような気がするんです。豊かではなかったから。

でも、豊かさの次に来るものっていうのは、あまり競争しなくていいという世代になってくるのは仕方がないと思いました。だから、他国と何かをするっていう時にちょっと引いてしまう、そのタフさがないというところが、ちょっと気にかかる場所です。

それともう一つ、私自身が一番今苦労していることが、この「リバーズ・カルチャー・ショック」、逆カルチャーショックなんです。私はずっと日本を恋焦がれて、日本をずっと8年間の中で理想化しちゃったんです。「日本はいい」って。そして、実際帰ってきてみたら、自分の中でできあがっていた日本と、日本人像とすごくずれていたんです。というのは、いいと思ったことが、なかなか自分の中で受け入れられなかったりするんです。これは多分、留学した人たちとか、海外に何年か住んでいた人たちは、みんな経験することだと思います。

これは日本人だけではないです。イギリス人が日本にいてイギリスに帰ってもそうだろうし、どこの国の人でも多分感じるのだと思います。私の中では何だろう。あまりにも、自由であるということを謳歌しすぎているんですね。やっぱり日本は「和を

以て貴し」というところがあります。でも、海外に出ると自分というものをしっかり持っていないと、あっという間に飲み込まれるというがあるので、かなり「個」というものをすごく押し出すようになっています。

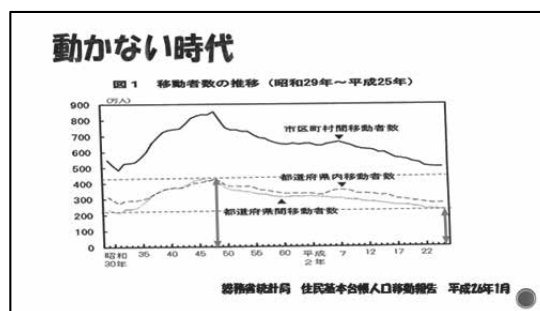
一番辛いのが、英語を苦勞して覚えて、私の英語なんてまだまだ中学生程度なものなんですけれども、英語は主語、次に述語がありますよね。だから、結果がすぐにわかるんです。でも、私の周りではダラダラ長い話をする人が多くて……。長い話を聞かなくていいことが、もう、私はできなくなっているみたいなんですね。「結局、結論は？」って、すぐに結論を求めたりとか、そういうことをしてしまう自分があったりします。そういう部分でなかなか大変なところもあります。

動かない時代

次、ここからが今の日本の話に戻るんですけども、先ほど少子高齢化という話をされましたよね。まず、今は「動かない時代」って言われます。このグラフ、何のことかという、これは総務省の統計局の出した人がどれくらい動いているかということを表すグラフです。昭和 29 年から平成 25 年までなんですけれども、一番、ここ、人が動いていた時代っていうのが 1970 年代初めです。それに比べて今は半分なんです。つまり、県、都道府県を越えないんです、人は。そういう傾向が強いんです。

それを表す調査があります。これはマイナビの調査なんですけれども、女子学生の 7 割以上が就職を両親に相談し、両親の影響を受け、親は娘を手元に置いておきたい

という傾向がある、ということでした。そして、地元に進学した学生の方が、早くから地元就職の準備を進めるという調査です。



あとは、特にこの調査は親の思いを調査してあります。まずは、親と同じ職業についてほしいという割合は、公務員、専門職（医師、看護師、弁護士等）は6割を超えていました。親は、自分の子供の就職先について、経営の安定と労働条件を気にして、親元から通えて、あまり厳しくない職場を望む傾向にある。だから私の時代、例えば「かわいい子には旅をさせろ」とかっていう格言が通用したのですが、もう「そういう時代ではなくなっているんだな」と思いました。

そして、ごあいさつの中にグローバルとか出てきたんですけども、海外就職は4割の保護者が望んでいないという結果が出ている。グローバルな人材育成が叫ばれる中、親は子供が海外で働くことをあまり望んでいないという、そういう調査結果が出ました。でも、国は「グローバルな人材育成」って言っているんです。この差は何でしょう。

親御さんの気持ちもわかります。ただ、親の思いとは裏腹に、これからの世の中の動きは変わらざるを得ないんです。先ほど

倉元先生がおっしゃった通りです。人が入ってくるし、自分も出ていくということがあるんです。人の移動は加速します。

明治の時代であれば、2ヶ月も3ヶ月もかけて船でカリフォルニアに行きました。でも、今は、11時間でピューッと行きます。だからこそ、感染症の拡大、広域化、あつという間でしょう。だから、アウトブレイクっていうのが起きる時代なんです。

人は、常に移動するんです。貨幣価値の高いところに。そして色んな国の人が、色んな国へ移動する時代になりました。その結果、何が起きるかという、文化が変わるんです。よく、ちょっと前までは、笑いで「海外では日本人はまだ刀を差してちょんまげを結っているって思っている人が多い」と。でも、もうそういう時代ではないでしょう。それは何かというと、もうインターネットが発達しているので、あつという間に、今起きた事件が世界中に拡散されるでしょう。だから、そういう情報のギャップっていうのはなくなってきました。

だからこそ、色んな文化、寿司があつという間に世界のメジャーな食べ物になって、寿司は「Sushi」。日本語がそのまま通じるような時代になりました。文化はどんどんミックスしていくと思います。だからこそ、私たちの隣に国籍の違う人が住むかもしれないということなんです。

そして、遠くの国で起こったことが日本に大きな影響を及ぼすことがある。アフリカ、西アフリカのところで起きたひとつの感染症がこれだけ日本を大騒ぎさせる、アメリカを大騒ぎさせることが起きるんです。そして、どこかの国の経済が破たんした。ちょっと前までどこかの国の国債が暴落し

てどうのこうのって言っていたんだけど、じゃあどこかの国が破たんしたから、うちは関係ないかって言ったら、それは違う。経済は全部つながっているの、日本が、もしかしたら石油を買えなくなるかもしれない。色んなことが起きたりします。

だからこそ、生まれ育った場所で一生を過ごすことが、当たり前ではないという、そういう時代になっていくんです。違う文化を受け入れるということは、とても難しいことです。でも、相手の違いを認めた上で、きちっと自己主張をしていかないと、相手には理解されません。だまっていると、都合のいいようにだけ判断されてしまうんです。だから、自分の言葉でちゃんと語ること。ましてや相手の国の言葉で語るっていう、その機会は非常に大事です。

そして、ずっと同じところに住んでいるということが悪いことではないんです。ただ、そのずっと同じところに住み続けていることが、一部の人間にとっては「世界の中心にいる」という錯覚を起こさせてしまうということがあるんです。その錯覚が、あらゆる危険を遠ざけてしまう。これはどういうことかということ、周りで起きていることに気づきにくくなるんです。変化に対応しにくくなってしまうということも同時に意味します。

地元のために

私が「これからの地元のために」っていうことを考えた時に、出て行って戻ってくる人と、ずっとそこにいる人。どちらも必要だと思います。社会のことをよく知る人と、外からの目で比較できる人が、交わってということが大事なんじゃないかなと思

います。何かを一緒にすること、そして一緒に何かをする場所があるということが大事だと思います。

私はそのさっき言った「逆カルチャーショック」に苛まれて、今の生活を維持するのが大変なので、まだ地元には貢献はできているとは大きく書けなかったのはちょっと恥ずかしかったからなんですけれども、ならどうしようかと考えているんです。もがきながらも、私に何ができるんだろうと考えているんですけれども、今日はこうやってずっと恥ずかしいんですけれども、ここに来てお話しするというのも、ちょっとした何かにお役に立てるんであればと思って今日はここに来ました。

そして、もうひとつ、出て行った人が戻りたいと思う、また外からいきなり来てしまう人が住み続けたいと思う。これも大事ですよ。住んでいる人はこのための条件を考え、作りだして維持していく努力をしていく必要があるのかな？と思っています。みんなが大事に思って、参加できる文化。

「文化」というと何かすごく難しいものになってしまうんだけど、やっぱりその土地に長く根ざしているものって、やっぱり時代を経て、いいから残っているんだと思うんです。

私はうちの近所のところに中尊寺ってありました。昔からあるので、フーンって思っていたら、つい最近、世界遺産になりました。「え、世界遺産！」って。近くにいると、全然そのありがたさが分からないけど、遠くにいる人から見ると、なんかすごいものだって思えてくる。全然、見方が変わってくるということがあるんだと思います。そして、自分がたった一人で外に出た時に、

ほんの親しんだ昔から親しんだものに触れた時の喜びってないんです。

だから、そういうものが、きっとこの弘前にもいっぱいあるでしょう。私は、その「じょんがら三味線」とか聞くと、涙が出るんですね。あれはソウルっていうか、魂に響く何かがあるでしょう。それを、よく三味線の兄弟が慰問に来てくれたりするんです、病院に。その時に患者さんが涙を流しながら聞いているのを見ると、やっぱりこれは何かがあるなって。それは、きっとみんなの心の中に共通のものがあるんだと思います。

ただ、それがあまりにも身近だと、「いつもあるものだな」って思ってしまうのかもしれない。意外と近くにあるものっていうものは、その良さに気づき難いというのがあるのかもしれない。

私は、今日のお話まとめに入るんですけれども、こうやってお話をする機会があったことで、私ももう1回、「自分が何でこういうふうになっちゃったのかな」ということを見つめ直しました。でもやっぱり、これから皆さんお仕事をしたり、色々、進学をしたりすると思うんですけれども、その時、その時をちゃんとその場で誰かと人間関係を作って、自分のいる場所を作ってもらおう。そうしたら、あなたが帰ってくる地元、あなたの居場所が1箇所だけではなくるんじゃないかなって思いました。

私の話は以上です。ありがとうございました。

(拍手)

九州，東京，東北，そして九州

——行って、帰って発見した「地元」——

佐賀大学アドミッションセンター 准教授 西郡 大



はじめに

皆さん、こんにちは。小松先生のお話を聞いて、また僕の話がこれから 40 分近く続きます。ちょっと疲れた人もいると思いますので、1 回伸びをしてみましょう。ここで一息入れてお話をしていきたいと思います（会場の高校生が伸びをする）。

さて、ご紹介がありましたように、「九州，東京，東北，そして九州～行って帰って発見した『地元』～」ということでお話をしますが、現在、私は佐賀大学で働いています。みなさん、佐賀県を知っていますか？ちなみに、九州に行ったことがあるという人はどれくらいいますか。手を高く上げてもらっていいですか（手をあげてもらおう）。やっぱりあまりいませんね。九州は相当遠

いんですね。その九州に佐賀はあるんですが、少し佐賀県について紹介させて下さい。数年前に「佐賀県」という歌が流行りました。この歌によって、佐賀県のイメージが相当曲げられたように思います。また、「佐賀のがばいばあちゃん」というのも数年前に話題になり映画にもなりました。今は「サガン鳥栖」というサッカーチームが J1 で 4 位と頑張っています。歴史的なところで言いますと、明治維新の時に言われた薩長土肥の「肥」は、佐賀県なんです。

皆さん、ちょっとこれを見てください（佐賀平野の写真を見せる）。佐賀平野なんです。これを見てもらおうと、「のどか、平和、田んぼ」といったのが皆さんのイメージと重なるかもしれませんが、ちょっと聞いてみます。正直、田舎だと思う人。手を挙げてみてください。気を遣わなくていいですよ。しっかり挙げてもらって構いません（会場の生徒に手を挙げさせる）。はい、ありがとうございます。その田舎というイメージ、これは甘んじて受けたいと思いますが、私は一言申したい。（九州の地図を見せながら）実は佐賀県佐賀市っていうのは九州のここにあるんです。九州の大都市は福岡県の博多です。仙台よりも大きい都市と言えます。この博多から佐賀までは 35 分で行けます。つまり、通勤・通学圏内なんです。関東で言うと横浜、関西で言えば神戸みた

いなところに佐賀はあるんです。こう考えると佐賀のイメージって変りませんか？

僕は転校生

さて、佐賀県の紹介はこれくらいにして、これから本題に入っていきたいと思います。私は高校までは転校生活を続けていました。いわゆる転勤族というやつです。皆さんの中にも転勤族がいるかもしれませんが、転勤族はせつないものです。まず最初に当時父が鹿児島で働いていましたので、鹿児島に住んでいました。ここに1年。その後熊本に行きました。ここに3年。その後福岡に行きます。ここで3年。そして、小学校入学1週間前に宮崎に引っ越し。宮崎では、小学校を卒業する4ヶ月前までいて、また福岡に引っ越ししました。皆さん、想像してください。4ヶ月しかない福岡の小学校生活です。卒業式の時には、周りのみんなは泣いているのに、思い出も少ない私は、涙もでませんでした。中学は卒業できるかなと思ったんですけれども、中学2年生の時に大分に転校。中学の時の転校は、時期的にとっても辛いものがありました。そして、ようやく高校において初めて1つの学校を卒業できたのです。このような転校生活を送っていたので、私には幼馴染はいませんし、自分の故郷というものを考えたときに、「故郷はどこどこです」というような感覚もありません。こんな感じだから、自分が使える方言も安定しなくて、自分の話している言葉は、どこの地域のものだったのか思い出せないこともあります。ですから当時の認識を振り返ってみると「出身地はどこですか？」と聞かれたら、とりあえず出身高校の場所である「大分県」というふう

に回答していました。ですが、その「大分県」に対して故郷とか地元という意識は全くありませんでした。高校時代は、そんなことよりもこう思っていました。「とにかく九州から出たい。大都市、東京に行きたい」と。こういうふうになんか思っていたわけなんです。

どこにでもいる普通の高校生

私の高校時代のプロフィールを簡単にまとめるとこんな感じです。大分市内にある超進学校とかではない普通の高校でバレー部に所属していました。全然強くありません。弱小バレー部です。1年生の時に、何となく理系ってかっこいいなと思っていて、あまり考えずに理系クラスを選択しました。その後、数学や物理が全然分からなくなり、ついていけなくなりました。3年次の成績は1学年400人ぐらいで250から350番目くらい。趣味とか特技は、特になし。ギターをやってもFコードから先に進めません。そんな感じです。本当に典型的な普通の普通の高校生でした。ただ、他の高校生と違ったところは、3年生の秋ごろから密かに浪人をしようと考えていたところではないかと思います。

浪人生活へ突入

そんなわけで、高校卒業後、浪人生活を始めました。その当時、大手の予備校が大分にはなかったもので、福岡の代々木ゼミナールに行くことにしました。初めて実家を出ての寮生活です。現役生の時は理系クラスだったんですが、教育学部系に行きたかったもので、国立文系コースを選択しました。ここから猛勉強が始まったわけですが、そ

の時に、こんな本に出会いました。『お前は馬鹿じゃない』という本です。これを書いた人は、吉野先生といって代ゼミの古文の講師をしていた人です。この方は、風貌の通り、昔、暴走族などヤンチャな生活をしていたそうなのですが、当時付き合った彼女を大学生から取られたという経験をしたようで、その悔しさをバネに一念発起して大学合格を目指し、猛勉強の末、わずか半年で大学合格を手に入れたという強者です。この本には、猛勉強の様子が生々しく描かれています。私はとても単純で影響を受けやすい人間ですので、「俺も死ぬほど勉強してやるぞ!」という気持ちで、1日平均15時間くらいの荒行に近い猛勉強に挑みました。実際には、平均ですので20時間やる日もあれば、10時間ぐらいという日もあったわけですが、とにかく勉強しました。そうすると成績はぐんぐん上がりまして、これは凄いで、相当いけるぞ、この調子で来年は、東京で花の大学生だという風に思い描いて受験に臨んだんですが・・・その結果は、受験したすべての大学に「不合格」でした。センター試験で大失敗。その後に体調を崩して何も追い込みができず、10数校受けて全て不合格です。もう無理。もうこんな生活をあと1年はできないということで、大学進学をあきらめ、大分の実家に帰りました。

フリーター生活と二浪目の決意

当然、何のやる気も起きません。実家に帰ると親は仕事に出かけますし、弟は高校に行くわけです。その日常的な感じが疎ましくてですね、自分の部屋の押し入れに布団を敷いて、朝は顔を合わさないように押

入れの襖を閉め、お昼くらいに起きてから街をぶらぶらして、夕方からパチンコに行って時間をつぶす。本当に駄目人間の典型的な生活をしていたわけですね。こんなことをやっていたら当然お金も無くなります。そんなわけでバイトを始めました。フリーター生活の始まりです。何をやってたのかというと、デパートなどで催されるイベント会場の設営業者のバイトです。いろんな機材や道具の搬出・搬入を深夜までやるのですが、意外と楽しかったのと、体を動かすと気が紛れるというのもあって、結構、真面目に働いてました。そこの社員さんに社員にならないかと誘われたりもしたんですが、さすがに、そこは断りました。

しばらくたって、もう少しバイトを増やそうかなということで、ファミレスのバイトに応募しました。バイトの面接は、店長さんとしたんですが、その際、去年は、予備校で浪人していて、大学目指していたんですよという世間話もしました。面接が終わって、店長さんが「今日の夕方、採用については連絡しますから」と言われて、自分としては、「バイトなんて落ちるわけがない」と思って家に帰りました。それで夕方になって電話が掛かってきてですね、採用の電話だと思って受話器をとったところ、「申し訳ないけど、採用することができません」そして、「もう1回受験頑張った方がいいんじゃない」と付け加えられました。

「えっ？不採用？」と啞然とするというか、完全に頭に來ますよね。いらんお世話だと。電話を置いた後、しばらくはイライラとしていたんですが、それと同時に、店長さんから自分の気持ちを見透かされたという感じがあって、何とも言えない歯がゆ

さを覚えています。この一件が直接的な要因ではないんですが、一つのきっかけとなって、もう1回大学を目指して頑張ってみようかという気持ちになっていったわけです。夏ぐらいですかね。「もう1回だけ頑張ってみよう」と決心をしました。

こうして、二浪目に突入したわけですが、二浪って大変だよね、とか、そんなに二浪なんてする人って少ないんじゃないなんて思う人も多いかと思いますが、今日、司会をしている泉さんも、実は私と同じ二浪組なんです。意外と周りを見回すと同じような境遇の人たちが多かったりするものです。

さて、再び、大分から福岡に出て安アパートを借りて一人暮らしの浪人生活を始めました。あまりお金を掛けられないので、予備校の本科生にはならず、自分が取りたい授業だけを受けることができるメイト生というのになりました。そして、一浪目の時は親の手前、国立大学を考えていたわけですが、なんとなく国立大学志望ではモチベーションが維持できないと思ったので、申し訳ないけれども、行きたい大学を受けさせて欲しい、早稲田大学を受けさせてほしいと親にお願いしました。早稲田は学費も生活費も高い東京の私大です。どうせ、無理だろうと思ったんでしょうか？「ま、頑張ってみろ」ということで、一応の許しを得て、私立文系コースに転向して、国語と英語と地理に科目を絞って受験勉強を始めたわけです。

二浪生活を始めるにあたって、勉強に対する考え方を変えました。一浪目は、とにかく時間をかけて、とにかくたくさん勉強すること、それが「努力」というふうに思っていたわけですが、勉強時間と努力は必

ずしもイコールではないんじゃないかと思うようになってました。とにかく結果を出すためにどうすればいいのか。どのような形で戦略を練っていけばいいのかということ徹底的に追求することが、本当の「努力」だと自分なりの新しい解釈に変えました。あとは、入試直前に体調を崩してしまうと何のためにそれまで頑張ってきたのか意味をなさなくなるという一浪目の失敗を踏まえ、体調管理を徹底したことが一浪目との大きな違いだったと思います。

こういうふうに偉そうな事を言うと、受けた大学にすべて合格といったのが、いわゆる一般的なサクセスストーリーだったりするのですが、凡人である私の結果は、立て続けに8大学不合格でした。早稲田以外の大学も一気に落ち続けたわけです。残っていたのが、早稲田の教育学部とあと一つどこかの大学だったと思います。「また全滅か〜」と思って、本命の合格発表前日に、東京に出てきていた友達とゲーゲー吐くぐらいまで飲んでもらいました。合格発表は、翌日の昼前にあったんですが、どうせ、また落ちてるんだろうなと思ってたんで、九州に帰る寝台列車の時間に合わせて夕方に早稲田のキャンパスに合格発表を見に行きました。夕方ですので、他の受験生や在学生たちは周りにいません。一人でぼーっと掲示板を見上げたら、なんとそこに自分の受験番号があったんです。うそ？間違っていないだろうなということで何回も見直したんですが、間違いなくそこに自分の受験番号がありました。その時は、本当に心から「よっしゃあー」という声が出ました。普通だったら、合格発表の時間帯は、大学のいろんなサークルの人たちがいて、胴上げ

とかしてくれるんですが、夕方ですので誰もいません。誰もいない合格発表板の前で、合格の喜びを一人噛みしめて、孤独な20歳の浪人生活にピリオドを打つことができました。今振り返ってみると、ファミレスの店長さん本当に不採用にしてくれてありがとうと、心からお礼申し上げたいと思っています。もしあそこで採用されていたら、私はこの場に確実に立っておりません。

憧れの東京へ

そんなわけで憧れの早稲田大学に合格して、憧れの東京へ上京したわけです。本当に有頂天になっていました。浪人時代の鬱憤がここで大爆発しました。とにかく、いろんなことをとりあえずやってみようというのがその1つです。私は二浪ですので、高校の同級生は、既に大学3年生になっていて、その友人の多くが「1・2年生の時にもっと色んなことをやっておけばよかった」って嘆くんですね。こんな様子を見て、「なるほど。そしたら、自分は1, 2年生の時から『やりたい』と少しでも思ったことは無理してでも徹底的にやろう」というふうな気持ちになったわけです。

私は地理が大好きだったので、地理の先生になりたいなと漠然と考えていました。特に、中学や高校の社会の時間などに、自分の体験や経験を交えて面白い話をしてくれる先生に憧れていました。ですので、自分も体験をもとにした面白い授業が出来る教師になりたいという思いで、とにかく、いろんな体験をしてみよう、とにかくやってみよう、行ってみようということで色んなことに挑戦してみたわけです。

どんなことをやっていたのかというと、

大学の長期休暇というのは夏に2ヶ月、春に2ヶ月あるんですが、この期間を利用して、色んなことをやってみました。例えば、夏だと国内、春は海外ということで、こんなことをやってみました。先ほどの倉元先生の話の中でヒッチハイクの話が出てきましたが、私も自分にできる程度のちょっとした冒険みたいなのをしたいと思って、東京から北海道までヒッチハイクしてみたり、東京から九州まで自転車で帰ってみようということで、テントを担いで二週間自転車を漕ぎ続けて大分まで帰ったりしました。また、地理や歴史の教科書でいろんな用語を勉強しますが、その用語やキーワードって実際どんなもんなんだろうかということで、モンゴルの「ゲル」ってどんな感じなんだろうか、草原の中では寒いんじゃないだろうかと疑問に思っていたので実際に行ってみるとか、今の中国にはないかもしれませんが、中国のトイレはドアがないということを中学生の時に聞いたことがありまして、本当にドアがないのかなということで、1998年ぐらいだったんですけども、行ってみたら本当にないんです。その他、最近では、色々とテロなどがあって大変な中近東ですが、内戦があったレバノンの状況を見に行ったり、ヨルダンとイスラエルの国境にある塩分濃度が非常に濃い「死海」という湖があるんですが、この湖に入ると浮かびながら本を読むことができるということを小学校のときに本で読んだ記憶がありまして、本当にできるのかどうか実際行って試してみたりもしました。もちろん、学生時代は、基本的にお金がありませんので、ツアーなんかじゃ行きません。学生には時間だけはたくさんあります。

1 ヶ月ぐらい時間を取って、どの国に入って、どの国から出るかだけを決めて、あとは行ったところで考える。その日どこに泊まるかということもその場で考える。行き当たりばったりなんです。ちなみに、私英語は全然しゃべれません。とにかく行ってみて、何ができるかということをやってみました。そういうことができるのは、学生生活のひとつの楽しみ方なのかなと思います。

では、こんなことばかりやっていて、お前は一体大学で何を勉強したんだということになるわけですが、実際入学したのは、教育学部教育学科社会教育専修というところでした。社会の先生に興味があったので、教員免許も取れるから社会教育でいいやってことでこのコースを選んだわけなんです。が、「社会教育」と「社会科教育」というのは全然別ものなんですね。いわゆる社会科の教え方などを勉強するのが「社会科教育」で、「社会教育」というのは、公民館の歴史とか、生涯教育に関する学校教育以外の部分を勉強するもんなんです。ですので、思っていたものと全然違っていて、自分の専門に全く興味を持てませんでしたし、二浪もしてましたので、留年しない程度に勉強して卒業したわけです。だけど、地理・歴史の教員免許は、ちゃんと取っておいりましたし、学校教育に関しては、たいへん関心は持っていました。

こういった状況だったんで、卒業後どうしようかと。はじめは高校教員というのも考えたんですが、正規の教師の採用枠は非常に狭き門だったんです。特に社会の先生とかは、もうほとんど枠がなくて、非常に難しい。さらに、この当時インターネットがどんどん普及している時代でしたので、

IT、情報技術の略ですけれども、情報技術が使えないとこの先やっていけないかもしれないという不安もありました。実は、学生時代の私は途方もない IT 音痴でありまして、「Yahoo」ってありますけれども、はじめに「ヤッホー」って呼んでました。そんな状況ですので、情報技術に全く疎い学生だったわけです。だったら、IT に関する仕事を仕事にすれば、そういったものも自然に身に付けることができるだろうと考えてまして、IT 業界で就職活動を開始したわけです。この当時、IT 業界は、たいへん調子が良くて、無事に内定をもらえました。このときは、東京にいましたけれども、全く九州、地元に戻るという意識はありませんでした。「東京最高！」って素直に思っていました。

サラリーマン生活と将来への思い

こんな感じでサラリーマン生活が始まりまして、片道 2 時間ぐらいかかる東京の満員電車で揺られながら通勤してました。入社式の時に社長からこんなことを言われたことを覚えています。「これからの時代はひとつの会社に勤めあげる時代ではない。だから、自分の能力とかスキルが非常に重要なんだ」と。これらからは転職して当たり前の世界になるんだということを、自分が入社した会社の社長が言うわけです。「なるほど、自分の能力を高めることが絶対必要になるんだな」と思ったことを記憶しています。だけど、大学の時に全くコンピューターとかできなかった人間がですよ。コンピューターのプログラムなんてすぐにできるわけないんです。新人研修期間というのがあるって、そこでコンピュータープログラ

ムの試験を受けさせられたんですが、私は全く点が取れず、落第者が集まるクラスに招集されて補習を受けることになりました。2, 3 ヶ月後の配属では、その当時、花形の部署だった開発部というところではなく、システムを実際に動かしていく運用部という部署に配属されることになりました。開発部というと、新しいものを作るわけですので、上司や同僚あるいはお客様とディスカッションをしながら色々と考えながら業務を進めていくことになるんですが、運用部の方は、上の人たちが作った指示書の通りにボタン押ししたり作業をしていく、自分の判断で作業をするといったことは、あまり歓迎されない部署でした。簡単に言うと、言われたこと以外のことをするなということです。自分の能力を高めていかなければいけないのに、まったく何も成長しない焦りがあって、とても仕事がつまらなく感じていました。ですが、とにかく3年間はやってみよう。3年我慢しろと色んな人にも言われましたので、とりあえず3年間はやってみようということで頑張っていたわけですが、27歳の時に、何となく将来が見えてきた気がしました。これは、職場が嫌だったというわけではありません。上司や当時の収入とかを考えると、かなり満足していたものがありましたが、自分としてはなんだかすごく温い状況にあるなあと。こんな温い状況が一生続くわけがないと自分なりの危機感を感じていたと言えます。

また、その当時、NHKでプロジェクトXという番組が流行っていました。色んな人たちが、自分の関わるプロジェクトで生じた困難を乗り越えていくドキュメンタリー番組だったんですが、それを見ているとか

っこいいんですね、そこに出てくる人たちが。自分の人生をかけて、仕事に打ち込んでいる映像を見ると、自分も人生をかけて打ち込める仕事をしたいと思うようになりました。じゃあ、どうしようかということで、自分の付加価値を高めようと思って、会社から帰って TOEIC という英語の試験勉強を試みたり、資格試験の勉強を試みたりしたわけです。ですが、なんかしっくりこないんですね。「本当に、これでいいのかな。この方向でやっていって自分の能力や技術を高めることになるのかな」と勉強しながら、いつも疑問に感じるわけです。このように悶々と自問自答していたときに「何か勉強しなきゃ」と心底思ったときです。まさに、人生で初めて心から「勉強しなきゃ」と思ったときと言えます。先ほどの小松先生の講演で、英語を勉強しなきゃというターニングポイントがあったという話がありましたが、多くの人にとって、本当に勉強したいと思うことなんて、人生に1度か2度あるかないかだと思います。そう思った時に、何をするかということが、実は非常に重要なことなんじゃないかなと私自身は考えています。

Google で検索したキーワード

このように、「勉強しなきゃ！」と思ったんだけど、何を勉強するかというのは実は明確ではなかったんです。気持ちだけが先行していました。そこで、自分に何ができるかなということを、自分のこれまでの経験を踏まえて考えました。自分は教育学部を出ている。情報関係の仕事で働いている。だから「教育」と「情報」。当時は、大学院でキャリアアップというのが流行っていた

こともあって「大学院」。この3つのキーワードで Google 検索しました。そうしたら一発目に、「東北大学大学院教育情報学教育部」という大学院がぼんと出てきたわけです。何だこれはということで、この内容を調べてみたら、教育と情報を融合して、何か新しいことをやっていこうというような学問分野でした。これは面白そうだなあということで、入試内容を調べてみると、「社会人入試」というのがあることに気づきました。社会人入試というのは、英語が入試科目にないんですね。3年の社会経験と研究計画が入試で問われるわけです。これはいけるかもしれない。落ちるはずがないという根拠のない自信もありました。というのも、教育学部を卒業して、情報関係で仕事をしてきた自分が落とされるはずがないという自分勝手な自信があったわけです。その結果、今回は、一発で合格して仙台行きが決まりました。ただ、仙台に行くことが決まったんですけれども、東京を離れて仙台に行くことに抵抗がなかったのかというと、抵抗がなかったわけではありません。東京を離れたくないという思いがもちろんありましたし、九州で育った人間にとって、東北っていうのは外国に近い。相当遠い地域という感覚があって、おそらく皆さんが九州に対して抱くイメージと一緒だと思います。そういった思いがあったんですが、なぜ最終的に行くことを決められたのかというと、それまで東京という見知らぬ地で離れて生活をしてきた。そのやってきたという自信と経験。これが非常に大きかったんじゃないのかなと思います。

東京から東北へ

こうして会社を辞め、東京から仙台に引っ越して、東北大学の大学院に入学しました。大学院に入ることを、別名で「入院生活」と呼ばれることもあるそうなのですが、大学院というのを説明すると、いわゆる大学の4年間は学部と呼ばれますが、この上に大学院というのがあります。修士課程と博士課程という二つの課程がありまして、この修士課程に入学したわけです。しかし、入学はうまくいったのですが、前年度まで社会人としての収入があったために、奨学金が受けられなかったんです。奨学金を当てにしていたので、まず、ここで躓きました。そのため、社会人時代の貯蓄の切り崩しやアルバイト等をしながら学生生活を送っていました。2年目以降に、奨学金を借りることができたんですが、最終的に5年間の大学院生活で借りた奨学金はいくらかというと450万円です。現在、この借金を少しずつ返済しています。中には、800万円近く借りている大学院生もいるそうですよ。大変です。

この大学院生活で出会いがありました。K先生との出会い。K先生って誰なのかというと、今日一番最初に発表をした倉元先生です。倉元先生は、大学入試の研究をしておりまして、大学入試の研究なんて、入学当初、私は全く興味がなかったんですけれども、大学入試を研究してみないかということで声を掛けられました。二浪までしてあれだけ苦しめられた大学入試の研究なんて誰がやるかって最初は思っていたんですけれども、だんだん考えていくと、意外にも1つの縁かな、とか、二浪したからこそ分かることもあるかもしれん、ひょっと

したら良い研究テーマかもしれないと都合よく思うようになって、最後には、「よろしくおねがいします」ということで、倉元研究室に入門しました。

ですが、私にとって根本的な問題がありました。それは何かというと、アカデミックというか、学問が全然わかっていないということです。先ほど話したように、大学4年間で課外活動は熱心に色々やりましたが、学問的な勉強は、何も訓練しておりませんでしたので悲惨な状況でした。

その一例をお見せしましょう。アンケートの分析には統計の知識が必要になったりするんですけども、図1は、ある統計手法を理解するための証明の一部です。こういったものを理解する必要があったわけですが、どうです？難しく見えますか？実は、ここで使われているのは、高校の数学の基本的な知識なんです。当然、もうこんなものは忘れています。ですので、大学入学後、全部捨てた教科書を、私は全部教科書を捨てたんですけども、28歳にして高校の教科書を買直して勉強しなおしました。

また、学術的な文章の書き方も全くダメでした。大学院では論文を書くことが求められるんですが、自分が書いた原稿、200ページくらいあるんですけども、それを持って、先生に論文指導をお願いするんです。そうすると、徹底的な駄目出しがありまして、「基本的書き出しが駄目」、「変」、「舌足らず」、「何だこれ」、「意味不明」といったコメントが何ページにもわたって書かれて返ってくるわけです。これをもらって、当時の私は、「倉元先生、非常に熱心なご指導ありがとうございます」と素直に思うわけなく、本当にこの野郎と思いながら

(先生すみません・・・)、これを何とかしなきゃと焦りながら修正して持っていく。そうしたら、また振り返りにあうというように感じで、文章の書き方とか、文献の読み方というものを習得していきました。

高校で学んだことは重要だった

データの分析は、統計の知識が伴う。統計を学ぶ上で、高校数学は重要。

高校の教科書を買って復習

(証明) $y_{j1} = \beta_1 f_{j1} + \varepsilon_{j1}$ $y_{j2} = \beta_2 f_{j1} + \varepsilon_{j2}$ とおく。 $\therefore$

よって、平均は、 $\bar{y}_{j1} = \beta_1 \bar{f}_1 + \bar{\varepsilon}_{j1}$ $\bar{y}_{j2} = \beta_2 \bar{f}_1 + \bar{\varepsilon}_{j2}$ $\therefore$

$$\begin{aligned} \text{Cov}(y_{j1}, y_{j2}) &= \frac{1}{N} \sum_{j=1}^N (\beta_1 f_{j1} + \varepsilon_{j1}) (\beta_2 f_{j1} + \varepsilon_{j2}) - (\beta_1 \bar{f}_1 + \bar{\varepsilon}_{j1}) (\beta_2 \bar{f}_1 + \bar{\varepsilon}_{j2}) \\ &= \frac{1}{N} \sum_{j=1}^N (\varepsilon_{j1} - \bar{\varepsilon}_{j1}) (\beta_2 (f_{j1} - \bar{f}_1) + (\varepsilon_{j2} - \bar{\varepsilon}_{j2})) \\ &= \frac{1}{N} \sum_{j=1}^N \{ \beta_2 (\varepsilon_{j1} (f_{j1} - \bar{f}_1) + (f_{j1} - \bar{f}_1) (\varepsilon_{j2} - \bar{\varepsilon}_{j2})) + (\varepsilon_{j1} - \bar{\varepsilon}_{j1}) (\varepsilon_{j2} - \bar{\varepsilon}_{j2}) \} \\ &= \beta_2 \beta_1 \frac{1}{N} \sum_{j=1}^N (f_{j1} - \bar{f}_1)^2 + \beta_2 \sum_{j=1}^N (f_{j1} - \bar{f}_1) (\varepsilon_{j1} - \bar{\varepsilon}_{j1}) (\varepsilon_{j2} - \bar{\varepsilon}_{j2}) + \sum_{j=1}^N (\varepsilon_{j1} - \bar{\varepsilon}_{j1}) (\varepsilon_{j2} - \bar{\varepsilon}_{j2}) \\ &= \beta_2 \beta_1 \text{Var}(f) + \beta_2 \text{Cov}(f, \varepsilon_1) + \beta_2 \text{Cov}(\varepsilon_1, f) + \text{Cov}(\varepsilon_1, \varepsilon_2) \text{ となる。} \end{aligned}$$

図 1

今のは大学院での勉強の話なんです、その他において、東北という地は、私にとって修行の場だったんです。大学入試の研究というのは、実は高校現場の実情を把握することが非常に重要なわけです。東北を中心とする高校の先生方には、たいへんお世話になりました。例えば、どのような考え方で進路指導とか、生徒指導とかをやっているのかを懇切丁寧に教えていただきましたし、アンケート調査をやった時、東北六県のいくつかの高校を対象にアンケート調査をやったわけですけども、アンケートを作った時に、こういった質問はあまり良くないよといった率直な意見を頂きまして大変勉強になりました。

さらに、今日のプログラムは、アウトリーチプログラムといいますけれども、個人的には、このアウトリーチプログラムに大変お世話になりました。実は、1回目は、盛岡で「テストって何だろう」というテー

マ、この時、私はまだ大学院生だったんですけれども、講演者としてしゃべらせていただきました。全くうまく話せなかったんですけれども、人生で初めて 1000 人近い人がいる場で話す機会をいただきました。2 回目は青森で司会者、4 回目は三沢市で講演者として登壇しました。実は、この時、個人的な話になりますが、自分の講演時間の 30 分前に子どもが生まれまして、初めての子どもだったんですけど、アウトリーチプログラムのおかげで立ち合いができなかったという思い出もあります。ですけど、私にとっては自分を成長させてくれたプログラムだと思っています。それはどういうことかという、やっぱり多くの人の前で話したというひとつの自信です。仮に、ものすごく緊張する場があったとしても、「自分はある時に 1000 人近い高校生の前で話したことがある。あれに比べれば、大したことない」と比較しながら考えることができるようになりました。そうだったわけで、私自身は東北の皆さんに、たいへん鍛えてもらったと感謝しております。

東北から九州へ：自分の「地元」を発見

このようにして、大学院生活を 5 年間過ごしました。5 年間の転職活動とも言えるかもしれません。佐賀大学への就職は、当時、ある九州地区の国立大学の先生に、佐賀大学で求人が出ているから、出してみないかと声を掛けられたので、ダメ元で出してみると、何か通っちゃって、あれよあれよという間に就職が決まってしまいました。

今の業務内容というのは大学入試に関する業務が中心です。まさか自分をあれだけ苦しめた大学入試でご飯を食べることにな

るとは思いませんでした。仕事は、いろいろ大変ではありますが、とても楽しく感じています。何が楽しいかというと、自分の専門を活かせるという点です。例えば、着任早々、いきなり専門家として色々とアドバイスを求められたんですが、もの凄いプレッシャーでした。ですが、そういう緊張感がプロとしてやってるなあという実感に繋がっていくことが楽しいわけです。また、大学院で勉強したことだけでなく、4 年間のサラリーマン生活で身に付けた IT スキルもここではとても役立っています。今考えると、自分のスキルが向上していないと焦っていたあの時代にも、実はしっかりと何かしらの力がついてたんですね。

さて、前置きが長くなりましたけれども、九州を出て 13 年目に再び九州に帰ってきたわけです。帰る場所から住む場所が変わりました。今の仕事は、特に高校と関わる部分を上げると佐賀大学でありながら、佐賀県以外の九州の高校の先生方とも交流の機会が多くあります。私にとって九州は、あれだけ転校をしてきましたので、長崎県以外は全て住んだことのある地域です。懐かしい方言や地域名をよく耳にしますし、いろんな高校名を聞いても違和感なく、頭に入ってきます。また、自分も同じ九州で高校生として過ごしましたので、そういった生徒に対する親近感も感じています。昔は感じなかったこの感じ。「何かしっくりくる」というのが今の素直な実感です。

さらに色んな発見がありました。実は東北地区の高校の進路指導と九州の進路指導のあり方って意外と違ってたりするわけです。東北とか他の地域はそうかもしれませんが、基本的に生徒が行きたいと

いう大学を受けさせるのが一般的かもしれませんが、九州のある地域の高校では、先生の指導の方が強かったりする場合があるんです。このように、地域によって進路指導の在り方が違うんだなということに気付いたりすることがありましたし、その他、九州での取り組みのどんなことが全国へアピールできるんだろうっていった、九州をもっと盛り上げたいという意識も生まれました。こういった最近の生活や実感を通して自分が言えるのは、生まれは大分だけ、「私の地元は九州です」と明言できるんじゃないのかなと思います。

「地元」は相対的なもの

さて、ここまでの自分の経験に基づいた話をしてきたんですが、ここからは皆さんと一緒に考えてみたいと思います。地元はどこですかと皆さんが聞かれた時に、あなたはなんと答えるかということなんです。例えば、こういう時に聞かれたらどうでしょうか。青森市で、あなたの地元はどこですかと聞かれたら、きっと皆さんは弘前市ですと答えると思います。仙台市で聞かれたら、多分、弘前ですという前に、青森県ですと答えるでしょう。九州で聞かれたら、青森県とは言わずに東北ですと答えるかもしれません。このように、聞かれる場所によって、自分の地元の答え方は変わってくるわけです。

もっと身近なところで考えてみたいと思います。皆さんも小学校、中学校、高校と進学してきたわけですがけれども、それぞれの段階で地元がどこって聞かれたら、何と答えてきたでしょうか。その答え方がずっと同じだったのかというと、それは違うん

ではないのかなと思います。例えば、みんなの自宅が学校の近くにある小学校時代に聞かれたら、何々地区に住んでいますという答え方になると思います。これが中学校、高校、大学となっていくと、自分の地元に対する答え方も変わってくるんじゃないでしょうか。つまり、自分の所属する集団とか地域によって、自分の地元の答え方が変わるということです。要するに、「地元」っていう物理的な範囲や地域があるわけではなくて、地元っていうのは、あくまで相対的なものであると私自身は考えています。

「地元」があぶない！？

地元のとらえ方、地元って何だろうと、この半年ずっと考えてきました。非常に難しい問題だなと思いますが、個人的に思うことは、2つの捉え方があるんじゃないかということです。1つ目は、「無意識的地元」と呼べるものです。これは主観的なものかなと思うんですけども、普段から感じている地元像です。何となくここが自分の地元なんだろうなといった、言葉で説明できる類のものではなくて、感覚的なもの。感覚的にこれが地元だって思える地元の捉え方、っていうものが「無意識的地元」ではないかと思います。

一方、「意識的地元」という考え方もできるかと思っています。感覚的なものではなくて、客観的なもの。他のものや地域と比較して、この部分が自分の地元なんだと、意識的に捉える地元像というのがあるんじゃないのかなと思います。

この記事、先ほど倉元先生も出されましたけれども、9割近い街が消える、地元消滅かというような記事が今年の5月の青森

地域の朝日新聞に出ています。これは何かというと、若年女性の減少率で、それぞれの地域が消滅するかどうかを試算したものです。これを見てみると、2040年まで、あと25年のうちに、人口規模が30万人以上の中核都市で、青森市は全国ワースト2というような結果が出ています。これは、女性の人口減少率が57.4%になっているということです。弘前市は54.4%です。ちなみに佐賀市は41%でした。この記事には、こんなことも書かれています。今一番の懸念は人口減少問題だと弘前市長が言っていますし、それに伴って人口減少克服プロジェクトみたいなものも行っているようです。また、弘前大学の先生は、全国的に人口が減る時代では、少ない人口でも豊かな生活を送れる街づくりを考えるべきだ。若者流出の阻止は、その結果としてもたらされると言っています。要するに、豊かな生活を送れる街づくりを考えなければいけないと言っているのだと思います。こうした問題を解決するための1つの方法として色んな自治体で考えられるのは、地元の魅力をアピールすることだと思います。皆さんも、そういった方策を一番最初に頭に浮かべるんじゃないでしょうか。

自分なりの「ものさし」を持とう

こうしたとき、比較して見つける地元というのが重要なのではないかと思います。例えば、自分の地元で、「あなたの地元のおススメは何ですか」と、ある旅行者に聞かれたとします。それに対して、「僕の地域の〇〇がとってもきれいです」というふうに答えたとします。さて、この答え方の背景には2つの考え方があると私は思うんです。

それは、「他のものは知らないけれども、自分が思うにとってもきれいだ」という考え方と、「この〇〇というのは、他のものと比較してとてもきれいだ」という考え方です。さて、先ほどの旅行者が知りたいおススメは何かと、その本心を考えたとき、他の地域にはない、この地域特有のおススメを聞きたいというのが本心だと思うんです。皆さんも旅行して、何かその地域のおススメを聞きたいと思うときは、同じように考えるのではないのでしょうか。つまり、多くの人が期待するのは、やっぱり、他と比較して素晴らしいと言えるおススメだと思うんです。これこそが、各地域のアピールポイントになるんだと思います。

また、地元の当たり前というものを疑ってみることも一つの重要な方法じゃないかと思っています。皆さんは「佐賀の七賢人」って知っていますか。こういう人たちなんですけれども（写真を見せる）、名前は聞いたことがあるという人もいるかもしれませんが、たぶん全員は知らないと思います。しかし、佐賀の小学生はほとんどみんな知っているんです。この七賢人。つまり、地元の常識は、他の地域では必ずしも常識ではない可能性があるわけですね。他にも、「こんなのが珍しいの?」とか、「自分の周りではたくさん取れて捨てているんだけど」など、自分のところでは、別に珍しくもない、また価値があるとも思えないものが他の地域から見ると非常に貴重なものだったりします。先ほど、冒頭で、佐賀と博多間が35分というお話をしましたけれども、佐賀の人は全然そういったことは意識しません。ずっと佐賀に住んでいる人は、それが当たり前だと思っているからです。

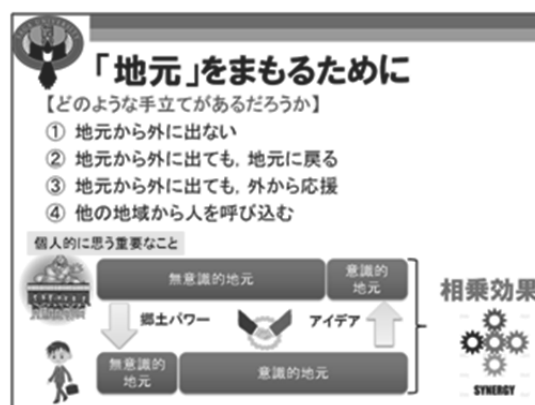
しかし、外から来た人から見ると、そういった部分が強みに見えたりするわけです。ここに、比較しないとわからない「意識的地元」の基盤があるんじゃないのかなと思います。

そして、こうした比較をするために重要なのが、「自分のものさし」というものだと思います。言うなれば、比較するための基準です。例えば、「良い、悪い」の価値判断であるとか、「する、しない」の意思決定。こういったものをやる際に、自分の色んなものさしに照らし合わせて皆さんは意思決定や判断をしていると思います。しかし、「ものさし」というのはやっぱり、幅広く測れる方がいいですよ。30センチしか測れないものとか、30センチの中でしか比較できないものよりも、60センチの長さをもって、幅広くで測れた方が色んな比較ができる。そうすると、この幅を広げるためには、自分の視野。今の測定限界をどんどん広げるような努力をしていかないと、この自分の「ものさし」というのは大きくならないように思います。つまり、大きくしていくための経験を積んでいくことが重要になるんじゃないかなと思うわけです。

自分の「地元」をまもるために

地元を守るためにということで、いくつかのアプローチが考えられると思います。地元から外に出ない。地元から外に出ても地元に戻る。地元から外に出ても外から応援する。あとは他の地域から人を呼び込む。色んなアプローチがあると思います。先ほどの無意識的地元と意識的地元という観点で見れば、ずっと地元にいる人。色んな理由で出ることができないとか、絶対に地元

に残りたいという人です。こうした人たちは、おそらく無意識的地元、感覚的地元像というのが非常に大きくて、意識的地元という認識の割合は少ないのかもしれませんが。一方、外に出ていった人、外から来る人というのは、色んなものを比較しながら、地元っていうものを認識していると考えられるので、無意識的地元よりも意識的地元の認識割合が大きいと思います。私としては、この両者のどちらが欠けてもうまいかなと思うわけです。



(図2)

図2の上の段に該当する人たちからは、下の段の人たちの無意識的地元部分に対して郷土パワーというか、パッションを送り込むという必要がありますし、下の段の人たちからは、上の段の意識的地元部分に対して、比較して発見したアイディアとか発想を提供する必要があるのではないかと思います。こういったものがうまく絡み合っ

て相乗効果がもたらされると思うんです。ですが、地元志向とか、地元に残りたいという人が、物凄く多くなってしまうと、このバランスが壊れてしまう。そうするとやっぱり、「今の環境を飛び出す人たち」が、

どうしても必要になってくるわけです。

最後に、まとめたいと思います。私自身、東北での生活を通して感じたこと。色々ありますが、東北には九州の人が知らない素晴らしいところがたくさんあります。ここで例を挙げるときりがないのでやめますけれども、たくさんあると思います。一方で、東北の人が知らない九州の素晴らしさというのもたくさんあります。こうしたものをお互いが知っていくことが、それぞれの意識的な地元につながるために重要なんだと思います。

もし皆さんが外に出るチャンスがあるのなら。チャンスが絶対ないという人は別かもしれませんが、チャンスがあるんだったら。ぜひ外に出るチャレンジをしてほしいと思います。外に出て失敗しても、若いうち、20代、30代のうちはいくら失敗しても、痛いのは痛いですが致命的な痛さにはならないと思います。社会の方も許容してくれるかもしれません。ですので、色んなところに出て行って、自分が成長して地元に戻ることができるような、そういった時がくれば良いよね。ということで話を終わらせていただきたいと思います。最後に、もし血迷って???もし、皆さんの何名かが九州に進学しようと思うことがあったら、「佐賀大学もよかばい」ということで、我が大学の宣伝をして終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

お 礼 の こ と ば

青森県立弘前中央高等学校 高田梨帆



小松先生のご講演では、小松先生の外国での経験や、帰国されてから日本で感じたことをお話ししていただきました。

西郡先生のお話は、九州や東北、その他様々な地方で感じたことがよくわかる、とても身近な内容でした。

今回のご講演が、皆さんにとって自分の将来や進路を考えるいいきっかけになったのなら、すごく良い機会だったと思います。本日は、本当にありがとうございました。

(拍手)

本日は、お忙しい中ご講演をしていただき、ありがとうございます。

倉元先生のご講演では、ここにいる人たちも受験する人がたくさんいると思います、センター試験のリスニングを体験させていただきました。なかなかできない経験で、非常に貴重なものであったと思います。

閉 会 挨拶

東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授 倉元直樹

最後にあたって、本当に何を言うか、考えないで段の上に上がることになりました。今、感じていることを率直にお話させていただきます。

開会のごあいさつにもありましたが、この「アウトリーチプログラム」を企画して、最初に青森で開催したのは、もう6年も前になるのですね。こんな感じで、毎回、リスニングの体験を入れながら、色んな話をさせてもらいました。のべにすると、今日来ている皆さんを入れて、多分、6,500～600人ぐらいの方に参加していただいたのではないかなと思います。最初に聞いてくれた人たちは、今は大学生、もしかしたら社会人になっている人もいるかもしれません。こんな話を一つ聞いたからって、人生が変わるほど甘くはないと思っています。ただ、いつかずっと将来になって、ちょっと思い出して、「こんなことを聞いたことがあったな、そういえば・・・」という話が出てきたとしたら、それは嬉しいことなのかな、と思います。ここにいる皆さんの中の何人かがそんなことを感じてくれたらよかったかな、と思っています。

おそらく、私たちが伝えたい何か、それは、ひとつは自分たちが生きてきた経験、それは僕が生きてきた経験、僕の時代の経験・・・西郡先生は少し若いですがけれども・・・、その経験で、答えが出る世の中ではないのだろうな、ということだと思います。本当に、様々な解決しなければいけない問題が

あって、皆さんには「問の立て方」から「答」まで、全て導いてもらわないといけない。おそらく、それを伝えたかったんだと思います。その中で、変わらないと思っていること、どんどん変わっていくこと、また、自分の周りで信じられていること、それと、外で思われていること、そういったことがおそらく、全部違っているのだと思います。何が大事なのかというのは、皆さん一人一人にお預けして、その中で考えてもらわなくてはいけないと思います。

物事には順番があります。例えば、30年後、40年後、50年後の社会を私たちも想像することはできるけれども、責任を持って担うことはできないと思います。それを皆さんに預けたい。そのためのメッセージが伝えることができたかなと少し思っています。

最後に、この「地元って何だろう？」という講演会を企画するにあたって、協力してくださった皆さんに感謝の言葉を述べたいと思います。まず、青森県教育委員会の先生方には、かなりの無理をお願いして協力していただきました。どうもありがとうございました。それから大学入試センターですね。あの、リスニングの器械というのは、実はかなり貴重なもので、貸していただくことに関しては、担当の方に相当の苦勞をおかけしたということがあります。心から感謝いたします。そして、青森県立弘前中央高校の先生方、ずいぶんとお手伝い

をしていただき、本当に普段の仕事以外のこともお願いして、ここまでたどり着くことができました。どうもありがとうございます。それから会場の弘前市民会館のスタッフの皆さま、運営に協力していただきましてありがとうございました。そして、最後に参加をしてくれた弘前中央高校、弘前高校、弘前南高校、弘前学院聖愛高校、東奥義塾高校の生徒の皆さん、それから先生方、保護者の皆さん。どうも最後までお付き合いいただきまして、ありがとうございました。

これにて、本日のプログラムを全て終了といたします。気を付けてお帰りください。

それではどうもありがとうございました。

(拍手)

平成26年11月12日

「地元って何だろう？」アンケート

今後の参考のためにアンケートにご協力ください。

1. 所属高校名

弘前中央高校 426 名, 弘前高校 245 名, 弘前南高校 197 名,
弘前学院聖愛高校 63 名, 東奥義塾高校 157 名, 未記入 4 名

2. 属性

(1) 高校生 1,076 名 (98.8%) (2) 教員 9 名 (0.8%) (3) 保護者 4 名 (0.4%)

3. 最初の講演「遊学のすすめ」は如何でしたか。

(1) よかった 903 名 (82.8%) (2) どちらとも言えない 179 名 (16.4%)
(3) よくなかった 9 名 (0.8%)

4. 2 番目の講演「地元へ帰ろう」は如何でしたか。

(1) よかった 891 名 (81.7%) (2) どちらとも言えない 191 名 (17.5%)
(3) よくなかった 9 名 (0.8%)

5. 3 番目の講演「九州, 東京, 東北, そして九州」は如何でしたか。

(1) よかった 986 名 (90.6%) (2) どちらとも言えない 100 名 (9.2%)
(3) よくなかった 2 名 (0.2%)

6. 全体の時間は如何でしたか。

(1) 短すぎた 8 名 (0.7%) (2) ちょうど良い 668 名 (61.6%)
(3) 長すぎた 408 名 (37.6%)

参加者数集計

参加者数集計: 1,311 名

青森県立弘前中央高等学校 1, 2 年生 479 名, 教員 20 名, 保護者 4 名

青森県立弘前高等学校 2 年生 278 名, 教員 10 名

青森県立弘前南高等学校 2 年生 233 名, 教員 11 名

東奥義塾高等学校 1, 2 年生 183 名, 教員 3 名

弘前聖愛高等学校 1, 2 年生 71 名, 教員 8 名, 保護者 2 名

他 1 名

スタッフ等: 8 名 (東北大学 4 名, 佐賀大学 1 名, 独立行政法人国立病院機構仙台医療センター附属仙台看護助産学校 1 名, 青森県教育庁 2 名)

多くの方々に御参加いただき, ありがとうございました。

編集担当：東北大学高度教養教育・学生支援機構高等教育開発部門 准教授 倉元 直樹

IEHE TOHOKU Report 58

東北大学高度教養教育・学生支援機構アウトリーチプログラム(7)

青森県教育委員会グローバルな志の育成事業「グローバルリーダー育成拠点校事業」

報告書

「地元って何だろう？」

主催：東北大学高度教養教育・学生支援機構

共催：青森県教育委員会

協力：独立行政法人大学入試センター

発行：2015 年 2 月

発行者：東北大学高度教養教育・学生支援機構

Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41

Tel: 022-795-7551

Email: ieheoffice@ihe.tohoku.ac.jp

印刷所：HOKUTO コーポレーション

* No.55 以前は CAHE TOHOKU Report として刊行